

I 2017年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2017年度大学評価結果総評】

文学部は、学部と各6学科の連携の在り方が明示され、学部の全体の教育理念と各学科の専門教育・教育方針の整合性がとれていると評価できる。それにより、学科独自の取り組み等の個別の研究・教育実践に違いは見られるが、初年次からの個々の学生の学びの支援体制として、教育方法、教育成果の検証・測定、学生指導等に関する検討事項が学部教員全体で共有されており、学部内(学科間)で良い影響を及ぼし合う環境を構築できている。

学部(学科)のカリキュラム改革等の実践では、教育目標と3つのポリシーおよびカリキュラムマップ、カリキュラムツリー、科目ナンバリング策定に関する課題を達成したことに加え、ILAC科目の導入等により、学生に多様な学びの機会を提供しつつ取り組んでいる点も評価できる。

学習支援等では、成績不振学生への組織的な指導法の確立、導入とともに、各教員が公務および担当ゼミ、卒業論文等の授業を通じて積極的に取り組んでいることは優れた取り組みである。一方で、学部(各学科)内での教員の過重な負担という課題では、今後の改善に期待したい。

さらには、学部(各学科)での多彩な研究・教育実践の推進を図るために教員組織・指導体制等について、年齢、性別、専門分野等の配慮すべき項目について明示、共有し、それにとまなう課題に真摯に取り組まれている。今後ともさらなる文学部の教育理念の実現に大いに期待したい。

【2017年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】(～400字程度まで)

2017年度の大学評価委員会の評価結果において、文学部の教育への取り組みは、自ら掲げる理念・目的、教育目標、各種方針に対して矛盾なく、相応の成果をあげているとの指摘を受けた。また、6学科が教育・研究の実践に固有性をもちながらも、ともに課題を共有し、相互により影響を与えあっている点についても一定の評価を得た。文学部教授会では2018年2月から3月にかけて、2018～21年度の中期目標の設定について審議した。その際、これらの指摘・評価を参考とし、現行の取り組みのさらなる発展をめざす目標設定を行った。

その一方で、学部内の教員の過重な負担という課題に対しては、専任教員の基準数ともかかわり、学部独自で対応できる問題ではないため、解決の道筋を見いだすにはいたらなかった。ただし、英文学科において、演習科目履修者数の平準化を図るための教員人事・科目増設を決定したことや、地理学科において、ゼミナール間の所属学生数の不均衡の是正が図られたことは、一つの有効な取り組み事例としてあげられる。

【2017年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

「2017年度大学評価委員会の評価結果」では文学部全体ならびにそれを構成する6学科において、学部の理念・教育目標・各種方針や、その教育と実践について大きな問題点は指摘されていない。だが現状に甘んじることなく、たとえば「中期目標(2018年度～2021年度)」に関して教授会にて一定の時間をかけて議論を行うなど、文学部のさらなる発展を目指して種々の活動を行ったことは評価できる。

一方、学部内の各教員の負担軽減については、学部としての組織的な取り組みを打ち出すことが困難であるとの認識だが、二つの学科で演習科目/ゼミナールの所属学生数の平準化(不均衡の是正)が図られている。そうした動きが他学科にも波及し、教員の教育・研究環境の改善と学生の学びの質的向上が実現されるよう、課題への継続的な取り組みに期待したい。

II 自己点検・評価

1 理念・目的

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、学部・研究科の目的を適切に設定しているか。

【理念・目的】

<文学部>

法政大学文学部は、1922年に法文学部の文学科と哲学科として開設されて以来、「自由と進歩」という大学建学の精神を受け継ぎつつ、文化全体と深く結びついた学問を探究し、幅広い人間的教養を備える人材を輩出してきた。そのよき伝統を継承しながら、新しい時代に向かって人間と社会をとらえ直す研究を進めるとともに、大学全体で培ってきた「進取の気象」を持つ自立した市民を育み、多様化する世界で問題の解決に向かう真の知性を示していくことを目的とする。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<哲学科>

哲学科は、自由と進歩という大学建学の精神のもとで、深い哲学的教養に裏付けられた自主自律の人材を育成することをモットーとする。すなわち、時代や権威に流されず進取の気象にあふれて、物事にむかって前向きな姿勢を保てる人、国際的な視野や多様な関心をもって、広く他者に心に向けて積極的に主張ができる人、ものごとを論理的に深く考えて、説得力のある議論ができる人などを総合的に育成することによって、現代社会に対して貢献することを目的としている。

本学科は、文学部のなかで最も長い歴史をもち、社会をになう逸材を数多く世に送り出してきた。その歴史を踏まえた上で、時代の変動を超えて世の中に貢献できるようつねに努力を重ねていく。

<日本文学科>

日本文学科は、その創設以来培ってきた「自由と進歩」という大学建学の精神を体現する学風を維持し、日本の文学・言語・芸能の歴史と現状についての先鋭で多様な研究を進めるとともに、その成果を生かして法政大学の伝統を担う「進取の気象」をもつ人材を育成することによって、千数百年にわたって蓄積されてきた日本語と日本文化の豊かな遺産を世界と次世代へと受け継いでいくことを目的とする。

<英文学科>

英文学科は、英語圏の文学・文化の理解を深めること、そして、英語および英語を含む自然言語の研究により、科学的思考法を養うことを教育目標とする学科である。

英文学科にひらかれている英米文学、英語学、言語学という三つの異なる分野は、「英語（およびその他の自然言語）」に関わる学問・学芸」として集約される。これら三つの異なる専門分野をとりもつ「英語」は、英文学科における学問の基礎をなすものである。英語に対する学習意欲を高め、基礎学力を上げることで、それぞれの学問分野への理解も深まると考えられる。

英語という「言語」を基礎として、文学を学ぶことによって、自他の人生や世界をより深く考えることのできる思考力と倫理意識を養うとともに、言語学を学ぶことによって、科学的な分析力と思考力を養うことを目標とし、さらに、人間的なものへの感受性と共感力を高め、同時にその共感を単なる情緒的感覚として持つだけでなく、他者に語りうる論理性を備えた、柔軟かつ理性的な人間を育成することによって、広く世界に貢献していく。

<史学科>

歴史学は史料（歴史資料）を集めて内容を解釈し、その史料分析を積み重ねて史実を捉え、その史実を体系化して歴史像を構築しようとする学問である。史学科では、史料に基づきながら歴史学の方法論を習得し、これによって過去から未来を論理的に見通せる思考力としての「歴史を見る眼」を持った人材を育成する。そのような「歴史を見る眼」は、歴史の中での自らの位置を客観的に見定め、次の一步をいかに踏み出すべきかを主体的に決断する力につながるものであり、「自由と進歩」「進取の気象」という法政大学の建学の精神を体現する。かかる人材の育成を通して、史学科は広く社会に貢献していく。

<地理学科>

欧米で「諸科学の母」と位置づけられる地理学は、現代ではまた、地球環境問題に深く関わる総合科学として高い評価を得ている。地理学が「旧くて新しい学問」と言われるゆえんである。

人間が生活の場としているこの地球表面付近において生起する自然的・人文的諸事象を時間的・空間的な分布現象として捉え、それらに対して周辺諸科学と関わりながら、科学的な視点からアプローチを試みるのが「地理学」である。本学科では、この総合科学としての「地理学」の学習を通して、現代社会において今後とも一層その存在が期待される「地理学」的な物の見方・考え方やその素養を獲得することによって、多様な社会に貢献できる有能な人材を育成する。

<心理学科>

心の世界は、主観的で外から見えない個人的なことのようには思われがちであるが、これを観察し測定できるような客観的な形でとらえ、科学的に分析していくのが心理学である。本学科では、発達と認知という2つの分野を柱に、社会に貢献できる心理学の知識をしっかりと身につけるとともに、心の仕組みを研究するための方法を修得していく。

【人材の育成に関する目的及びその他の教育研究上の目的】（教育目標）※学則別表（11）

文学部は、各学科のカリキュラムのもと、以下に示すような人材を育成する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

1. 古今東西の文献・資料・情報を研究・調査することにより、広い視野・深い教養にもとづく独創的な思考力を発揮できる人間。
2. 歴史・世界・社会の中で客観的に自らの位置を見定め、柔軟な感受性をもって他者を理解し、多様な価値観を公正に評価できる人間。
3. 当面する課題を検証し、解決策を考え、それを説得力をもって発信できる人間。

<哲学科>

哲学科は、「自由と進歩」という大学建学の精神のもとで、深い哲学的教養、人間理解、広い視野に裏付けられた次のような人材を育成することを目標とする。

1. ものごとを論理的に深く考えて、説得力のある議論と問題の解決策を提示し、発信できる人間。
2. 国際的な視野と多様な関心をもって、世界と人間・社会のありかたとその課題を洞察し、広く他者に心を向けて積極的に主張を展開できる人間。
3. 時代や権威に流されず「進取の気象」にあふれて、ものごとに向かって前向きな姿勢を保ちつつ考察し、発信できる人間。

<日本文学科>

日本文学科は、所定の教育課程のもと日本の文学・言語・芸能の歴史と現状を専門的に学ぶことにより、以下に示すような資質・能力を備えて、国際化・情報化が進む 21 世紀社会において自らの見解を自らの言葉で的確に発信できる人材を育成する。

1. 日本文学の作品世界のみならず、現代の様々な事象を繊細に感受できる豊かな感性。
2. 豊かな感性によって感受した様々な事象について、論理的に分析・考察する能力。
3. 分析・考察の結果を独自の世界や思想を構築することに結びつけられる創造性。
4. 上記の資質・能力によって得た一連の成果を社会に向かって魅力的に発信していく表現力。

<英文学科>

英文学科では、文学部全体の教育目標のもと、以下に示すような人材を育成する。

1. 英語という「言語」を基礎に、文学を学ぶことによって自他の人生や世界をより深く考えることのできる思考力と倫理意識を持つ人間。
2. 英語という「言語」を基礎に、言語学を学ぶことによって科学的な分析力と思考力を持つ人間。
3. 「人間とは何か」という問いを、英語を中心とした言語を通して思索することのできる人間。
4. 言葉を通して、人間的なものへの高い感受性と共感力を持つと同時に、その共感を、単なる情緒的感覚としてではなく、言葉によって他者に語りうる論理性を備えた柔軟な理性的な人間。
5. 英語力、日本語力、読解力、文章力、論理的思考力、分析能力を持つ人間。

<史学科>

史学科は、所定のカリキュラムのもと、以下に示すような人材を育成する。

1. 具体的な史料に基づいた歴史学の方法論を習得することにより、歴史学への学問的関心を深め「歴史を見る眼」を持つことのできる人間。
2. 史料を博捜しその価値を判断する能力をもち、史料を適切に活用した実践的な研究ができる人間。
3. 現代社会、さらには未来への展望をも含めた人類史を、「歴史を見る眼」から判断することのできる人間。

<地理学科>

地理学科は、学科が提供するカリキュラムの下、以下に示すような人材を育成する。

1. 地理学の方法論を学ぶことによって地理学的視点から「地域の特性」を理解する能力をもった人材。
2. 地理学的見方・考え方から得られた「地域の特性」を自ら社会に発信する意欲をもった人材。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

3. 目の前にある「社会的な問題」に対し、自ら率先して取り組み、解決する能力を持った人材。

<心理学科>

心理学科では、以下に示すような人材を育成する。

- 幅広い心理学の知識・技能を獲得することで、人や社会に対して多面的かつ客観的に洞察することができる人間。
- 心に関わるさまざまな問題を専門的な立場から検討でき、自らの力で新たな知識を生み出せる人間。
- 的確なプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、グループ活動能力を有し、他者と協働しながら自分自身の持つ知識・技能を活用し、社会に向けて効果的に発信できる人間。

①学部（学科）として目指すべき方向性等を明らかにした理念・目的が設定されていますか。	はい いいえ
②学部（学科）の理念・目的は大学の理念・目的を踏まえて設定されていますか。	はい いいえ
③理念・目的の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。	

(~400字程度まで) ※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、具体的な検証プロセスを記入。
 学部・学科における理念・目的の適切性の検証は、執行部の主導のもと、教授会、教学改革委員会、各学科の学科会議において実施される。そのプロセスは原則として以下のとおりとなる。
 【1】教授会：検証実施の決定。→【2】教学改革委員会：検証方法の決定。→【3】学科会議：検証の実施。→【4】教授会：検証結果の承認。なお、検証の時期については固定化されていない。

1.2 大学の理念・目的及び学部・研究科等の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

①学部（学科）の理念・目的は学則又はこれに準ずる規則等に明示していますか。	はい いいえ
②どのように理念・目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。	

(~400字程度まで) ※具体的な周知・公表方法を記入。
 学部および各学科の理念・目的は、法政大学ホームページ、文学部ホームページにおいて公表している。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

文学部では大学の理念・目的を表明する法政大学憲章「自由を生き抜く実践知」に通底する、建学の精神（「自由と進歩」や「進取の気象」）を踏まえ、独創的な思考力、他者への理解、課題検証や解決策の立案能力に優れた者の養成を目的としており、設定されている理念・目的からその目指す方向性は明らかである。ただし各学科の教育理念や目的については独自性を担保しつつ、理念・目的の内容や形式をより統一するなど、学部と学科の明示的な関連付けが望まれる。
 理念・目的の適切性を検証するプロセスは明確である。
 学部・学科の教育理念や目的については、学則および規則等に明示されており、法政大学 HP や文学部 HP にて教職員および学生に周知され、社会に対しても公表されている。

2 内部質保証

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。	
①質保証委員会は適切に活動していますか。	はい いいえ
【2017年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】 ※箇条書きで記入。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・文学部質保証委員会の構成……各学科より委員1名が選出され、計6名で構成される。また、執行部（学部長・教授会主任・教授会副主任）がオブザーバーとして毎回、出席する。
- ・第1回：2017年4月26日。主な議題、①委員長の選出、②2017年度文学部質保証委員会の役割、③「自己点検・評価シート」チェックのスケジュールについて、④「自己点検・評価シート」のチェック体制・方法について、⑤「自己点検・評価シート」チェック後の振り返りについて。
- ・第2回：2017年5月31日。議題、①「自己点検・評価シート」チェック後の振り返り、②2018年度以降の自己点検・評価シートのあり方、③3つのポリシーへの指摘・改訂について。
- ・第3回：2017年12月6日。議題、①質保証委員会の今後の役割。
- ・第4回：2018年2月21日。議題、①自己点検・評価シートの年度末報告、②来年度の質保証委員会の委員の確認、③質保証委員会の今後の役割。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・2017年度は文学部質保証委員会の開催回数を4回とし（2016年度は2回）、自己点検・評価シートのチェックのあり方、今後の質保証の取り組みについて審議する機会を増やした。	2.1①

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

文学部質保証委員会においては構成員が定められ（各学科より委員1名計6名に加え執行部がオブザーバーとして出席）、定期的な開催と運営により、適切に学部内の点検・評価が行われ質保証がなされている。委員会開催回数を前年度の2回から2017年度は4回に増やし、活動内容のさらなる充実が図られたことは評価できる。たとえば具体的には「自己点検・評価シート」への対応が審議され、3つのポリシーの改訂が執行部へ提言された。また質保証委員会の役割が継続的に検討されている点も、新たな展開が期待できる。引き続き客観的な視点から学部における諸対応のチェックを行い、大学評価委員会への対応案件のみならず、具体的かつ主体的な活動を行うことでPDCAサイクルの一層円滑な循環が期待される。

3 教育課程・学習成果

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

【学位授与方針】

<文学部>

文学部は、各学科のカリキュラムのもと、所定の単位を修得し以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」を授与する。

1. 各専門分野の学問内容や研究方法を理解している。また、幅広い教養を備えている。
2. 自ら問題を発見し解決していく思考力や調査力を有している。
3. 自らの考えを論理的に表現できる文章力やプレゼンテーション能力を有している。また、他者と協力し議論しながら多角的に問題をとらえることができる。

<哲学科>

哲学科は、所定の単位の修得により以下に示す水準に達した学生に対して「学士（文学）」の授与を認める。

1. 哲学的専門性を備えた知識をもつとともに、深い教養と国際的な広い視野をもっている。
2. 古今の哲学者のテキストを正しく理解でき、同時に哲学的知見を現代の諸問題に応用する力を有している。
3. 論理的な理解力や表現力を持ち、説得力のある仕方で口頭での発表や文章による表現ができる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ディスカッション等において哲学的教養に裏打ちされた豊かなコミュニケーション能力を示せる。
- 哲学的な問題発見能力と独創的な発想力・問題解決能力をもっている。

<日本文学科>

日本文学科は、所定の教育課程のもと、所定の単位を修得し、以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」の授与を認める。

- 日本の文学・言語・芸能の歴史と現状についての基本的な知識を身につけている。
- 所属する文学・言語・文芸の三コースいずれかの領域における正確な読解力を有している。
- 自ら問題を発見し、その問題について考察を深められる思考力を有している（文学・言語コース）。
- 自ら主題を発見し、その主題について構想を深められる想像力を有している（文芸コース）。
- 自らの研究や発想の成果を的確に伝えられる日本語の表現力を有している。

<英文学科>

英文学科では、所定のカリキュラムのもと、所定の単位を修得し、以下に示す水準に達した学生に対して「学士（文学）」の授与を認める。

- 論理的な日本語力・英語力とそれに基づく高度なコミュニケーション能力を備えている。
- 批判的・論理的思考力とそれに基づく課題発見力・課題解決力を有している。
- 自らの文化や言語を、グローバルな文脈の中で相対化・客観化して捉える能力を有している。
- 英米文学・文化研究または科学的な英語学・言語学研究の基礎的な知識をもとに、一つの課題の解決のために、様々な知識を有機的に結びつける能力を有している。

<史学科>

史学科は、所定のカリキュラムのもと、所定の単位を修得し以下に示す水準に達した学生に対し、「学士（文学）」の授与を認める。

- 国際的な視野と、政治・経済・社会・文化などにわたる幅広い歴史知識を得ることによって、現代社会の問題を見る眼を養い、未来を展望することができる。
- 史料の批判的考察から体系的理解に至る歴史学の分析方法を習得して思考力・判断力を培い、自立的に問題を発見・追究・検証することができる。
- 発表・討論において、自分の意見を論理化・体系化して相手に伝え、かつ相手の意見を理解することができる。
- 次世代の教育に歴史学の成果を生かし、また、文化遺産の継承に貢献することができる。

<地理学科>

地理学科は、地理学科のカリキュラムのもと所定の単位を修得し、以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」の授与を認める。

- 人間の生活の舞台である地球表層の自然環境や人文・社会環境について基礎的な知識を身につけ、地理的諸事象の基本的メカニズムを理解しているとともに、幅広い教養も身につけている。
- 地理学的な思考力やものの見方を身につけ、それらに基づく研究方法を用いて考察することができる。
- 地理学の知をもって社会の諸問題に関心を持ち、他者の声に耳を傾け、自分の考えを口頭表現や文章表現によつて的確に発信することができる能力、地域社会のニーズに応えられる能力、および諸問題を解決する能力を身につけている。

<心理学科>

心理学科のカリキュラムのもと、所定の単位を修得し以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」の学位の授与を認める。

- 人の認知について科学的理解をすることができる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2. 人の発達について科学的理解をすることができる。
3. 観察・実験・調査を通して、心の機能を測定し、分析することができる。
4. 国内外の先行研究や社会的要請をふまえて、自ら課題を設定することができる。
5. 研究・学習成果を的確に他者に伝えることができる。
6. 研究・学習目標を達成するために、他者と協働することができる。

①学部（学科）として修得すべき学習成果、その達成のための諸要件（卒業要件）を明示した学位授与方針を設定していますか。

はい いいえ

3.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

【教育課程の編成・実施方針】

文学部では、各学科のカリキュラムのもと、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

1. プレゼンテーションやディスカッション等の能力を涵養するため、各学科の専門科目として「ゼミナール」や「演習」を設置している。
2. 文章読解・資料調査・レポート作成・ディベート等の基礎的なスキルを涵養する初年次教育として、「基礎ゼミ」等を設置している。
3. 幅広い知識や教養を涵養するため、市ヶ谷リベラルアーツセンター科目の単位を卒業所要単位に含めている。
4. グローバルな問題意識を涵養するため、全学科を対象とする「共通科目」や他学科開講科目を設置している。
5. 課題を発見し検証していく思考力や表現力を涵養するため、「卒業論文」を4年間の集大成として位置づけている。

<哲学科>

哲学科は、学科の人材育成の目的を達成するために以下に示す教育課程を編成する。

1. 文章読解、ディスカッション、プレゼンテーション、レポート作成の基礎力を涵養するために、初年次に基礎ゼミを設置している。
2. 国際的な幅広い知識を獲得し、広い視野でものごとを思考できる能力の養成をはかるために、リベラルアーツ科目を卒業所要単位に含めている。
3. 専門科目については、哲学科卒業に相応しい学力を段階的に身につけられるようにするために、概論科目・哲学史科目および基礎演習からはじめて、特講科目、演習（ゼミ）を経て卒業論文に至るといった発展的な教育課程を編成している。
4. 視野の広い問題意識を養うために、文学部の「共通科目」、および他学科共通科目の履修を可能にしている。
5. 学生がみずから課題を発見し、解決してゆく力を養うために、卒業論文を四年間の学びの集大成として位置づけている。

<日本文学科>

日本文学科は、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

1. 1年次においては、大学生の学びに必要とされる能力の習得のため、少人数制による初年次教育科目を設置するとともに、専門教育への導入として、日本の文学・言語・芸能、また中国文学について基本的な知識を修得できる科目を配置している。
2. 専門性を広く把握すると同時に深く追求するため、文学・言語・文芸の3コースを設置し、学生は2年次からそのいずれかに籍を置き、少人数制のゼミナールに所属する。より正確な読解力、深い思考力・想像力、的確な表現力、問題発見・解決能力を涵養するため、専門分野に関する科目および隣接領域に関する科目を、段階的に、また体系的に履修できるよう配置している。
3. 教養教育科目（市ヶ谷リベラルアーツセンター科目）の単位を卒業所要単位に含むこととする。センターのカリキュラムに従って履修することにより、さらに幅広い学問分野の知識を得て、柔軟かつ多角的な認識力・思考力・問題解決力等を涵養する。
4. 4年次においては、ゼミナール担当教員の指導のもと、卒業論文の執筆に取り組む。なお、卒業論文は、日本文学科の教育課程における集大成とし、大学での研鑽の成果を発揮するものとして位置づける。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<英文学科>

英文学科では、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

1. 1年次においては、「演習科目」として、基礎ゼミにおいて導入教育を行ない、同時に、概説科目を配置してさまざまな分野への導入となる「講義科目」を設置している。
2. 2年次においては、学生各自の基礎的な英語力を向上させるための Speaking や Writing などの実践的な科目とともに、学問への興味をかき立てるように、少人数教育としての2年次演習および専門科目を配置している。
3. 3年次においては、専門的な知識が深められるように、併設されている専門科目と合わせて少人数制のゼミを配置している。
4. 4年次においては、学生各自が選んだ研究テーマを卒業論文としてまとめられるように、担当教員のきめ細かな面談指導と添削指導を行なっている。
5. 上記の1～4と並行して、4年間の学生生活を通して幅広い英語力の獲得や文化交流ができるように、海外の提携大学への短期・中期の留学制度を設定している。

<史学科>

史学科では、所定のカリキュラムのもと、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

1. 1年次には教養教育に加え、国際的な視野と幅広い知識を身につけるため、日本史・東洋史・西洋史の概説を設置している。
2. 新生が大学における多様な授業に十分に適応し、その能力を発揮することが可能になるよう、初年次教育科目として「基礎ゼミ」を設置している。
3. 2年次以降、日本史・東洋史・西洋史の三専攻に分かれ、演習（ゼミ）を中心とした歴史学の専門的教育に入る。
4. 自立的に研究できる能力を向上させるため、演習とともに史料の活用や外書の読解能力を実践的に訓練する授業を設置している。
5. 自分の専攻にとどまらず幅広い学識を得るために履修できる多様な講義科目を設置している。
6. 4年生は所属ゼミ担当教員の指導のもと、一つの研究課題に取り組み、卒業論文を作成していく。課題を発見し検証していく思考力や表現力を涵養するため、「卒業論文」を学科における学業の集大成として位置づけている。

<地理学科>

地理学科では、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

1. 幅広い知識や教養を涵養するため、市ヶ谷キャンパスのリベラルアーツ科目の単位を卒業所要単位に含めている。また、1年次には「基礎ゼミ」で、大学での学習方法の基礎・基本を身につけさせる。
2. 地理学科の専門科目は、1年次では入門的な科目、2年次以降は地理学の様々な分野の基礎的知識を身につけるため各論科目が配置されている。また、主に3年次以降において、地理学の方法論や研究法を身につける、演習や実習科目が配置されている。
3. フィールドワークを通じて地域の実態を調査し、その結果をもとにレポートを作成することによって、調査技能、研究方法および文章表現能力を身につけさせる「現地研究」が必修科目の一つとして配置されている。
4. プレゼンテーションや討論を通して、地理学の研究手法や体系を学び、問題解決能力や卒業論文作成の基礎的能力を身につけるため、演習（ゼミ）が配置されている。
5. 課題を発見し検証していく思考力や表現力を涵養するため、「卒業論文」を4年間の集大成として位置づけている。優秀な学生が早期に研究活動に専念できるよう、3年次で早期卒業し大学院修士課程へ進学する5年一環プログラムも用意されている。

<心理学科>

心理学科は、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

1. 人の心を研究するために必要な知識・技能を偏りなく修得できるように「認知」と「発達」の二領域を中心とした専門科目を配置している。
2. 心理学の全領域に関わる基本的な知識・技能を学生が修得することを促すために、選択必修の学科基礎科目という科

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>目区分を設定している。</p> <p>3. 1年次に基礎ゼミ、2年次には演習Ⅰ・Ⅱ、3年次と4年次には研究法Ⅰ・Ⅱを配置し、一貫して少人数での演習形式の科目を履修できるようにし、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を系統的かつ継続的に修得できるようにしている。</p> <p>4. それまでに修得した知識・技能を活用して、人間の心について自らが検討する価値のある問題を設定した上で、科学的・客観的に分析し、その研究成果を明瞭に記述する能力を涵養するため、「卒業論文」を4年間の集大成として位置づけている。</p>	
① 学生に期待する学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成・実施方針を設定していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
② 教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を周知・公表していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>【根拠資料】 ※冊子名称やホームページURL等。</p> <ul style="list-style-type: none"> 『文学部履修の手引き』『文学部講義概要（シラバス）』 教育目標 http://www.hosei.ac.jp/gaiyo/rinen/hoshin/mokuhyo/gakubu.html 学位授与方針 http://www.hosei.ac.jp/gaiyo/rinen/hoshin/gakui_juyo/gakubu.html 教育課程の編成・実施方針 http://www.hosei.ac.jp/gaiyo/rinen/hoshin/kyoiku_katei/gakubu.html 	
③ 教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。	S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>(～400字程度まで) ※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、検証プロセスを記入。</p> <p>学部・学科における教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性の検証は、執行部の主導のもと、教授会、教学改革委員会、各学科の学科会議において実施される。そのプロセスは原則として以下のとおりとなる。</p> <p>【1】教授会：検証実施の決定。→【2】教学改革委員会：検証方法の決定。→【3】学科会議：検証の実施。→【4】教授会：検証結果の承認。</p> <p>なお、検証の時期については固定化されていない。2017年度においては、5月に文学部質保証委員会の指摘を受け、6月に執行部より各学科へ3つのポリシーの検討を要請し、9月に検討結果の集約を行った。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>2017年度に実施した3つのポリシー見直しのプロセスについては、下記議事録を参照。</p> <ul style="list-style-type: none"> 2017年度第2回文学部質保証委員会議事録 2017年度第3回教学改革委員会議事録 2017年度学科主任会議議事録 2017年度第5回文学部定例教授会議事録 	
3.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
① 学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>(～400字程度まで) ※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。</p> <p>各学科とも、学部・学科の教育課程の編成・実施方針にもとづき、適切な教育課程・教育内容を提供している。すなわち、学科ごとに概論科目と多様な講義科目を設け、専門分野の学問内容を深く、かつ網羅的に学べるカリキュラムを構築している。また、ゼミナール科目を年次ごとに多数開講することによって、専門分野の研究方法を身につけ、プレゼンテーション、ディスカッション、課題発見・解決能力を高める教育に力を入れている。特に、ゼミナールとその延長にあたる卒業論文は必修科目として位置づけられており、文学部の教育の最大の特徴となっている（SSI学生は選択制）。また、哲学・英文学・史学・心理学の各学科では、大学院科目の履修も認めており、自身の学修活動をより高度なものへと触発する場も設けている。さらに、幅広い教養の涵養を図るためのILAC科目（2016年度以前入学生用の名称は「市ヶ谷基礎科目・総合科目」。以下、「ILAC科目」で統一する）、文学部共通科目、他学部・他学科公開科目等を含めることにより、幅広い視野と教養を身につけることが可能となっている。</p> <p>なお、上記以外の各学科の教育課程・教育内容の特徴は以下のとおりである。</p> <p>【哲学科】</p> <p>専門科目の中心に位置付けられる「哲学特講」「哲学演習」については、各担当教員の専門分野を生かしながら、幅広い</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

分野にわたる授業内容を提供している。「哲学特講」については、春・秋学期で担当教員を代え、学生の多様な問題関心に対応するように、教育内容に多様性をもたせている。

【日本文学科】

2年次以降は文学・言語・文芸の3コース制を採用している。学生はコース別の必修科目と「ゼミナール」、および各コース共通で履修できる選択必修科目・選択科目を通し、諸領域にわたる知識を深く身につけることができる。なお、文芸コースでは原則として卒業制作（創作作品）を提出することとなっている。

【英文学科】

「英語という言語が基礎にある学科」という特徴を活かし、英米文学、英米文化から英語学、言語学、英語教育学まで、幅広い領域を学べるように工夫されている。また、英文学科派遣留学制度（SA）を設けて国際化に対応し、国際社会に貢献しうる能力をもった人材を育成している。

【史学科】

専門基礎科目、専攻系科目、特講系科目、実習系科目、演習（ゼミ）に分け、学生の知識・能力の深化に合わせた教育内容を資料分析のための方法論、歴史像を構築するための理論と知識にわたり、包括的かつ実践的に習得できるカリキュラムを構築している。

【地理学科】

1年次に「地理学概論(1)・(2)」「地理実習(1)・(2)」等を通じて、大学で学ぶ地理学の体系と方法論の基礎を習得し、2年次以降は選択必修科目と選択科目によって地理学の専門的な方法論や知識を学ぶとともに、「現地研究」において習得した方法論の実践を図ることとしている。

【心理学科】

論文の検索の仕方、読み方、データの分析の仕方、プレゼンテーションの仕方といったスキルに関しては、1～4年次の全学年において演習形式で行い、卒業論文につなげている。また、心理学を生かした職業選択を支援することも視野に入れ、現場で働いている学外の特別講師を毎年招聘し、講演会を実施している。

【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等

- ・ <http://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/curriculum/index.html>
- ・ 『文学部履修の手引き』『文学部講義概要（シラバス）』『ILAC科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目 講義概要（シラバス）』
- ・ 『文学部英文学科 Study Abroad Program』（学生への配付パンフレット）
- ・ 法政心理ネット (<http://www.hosei-shinri.jp/>)

②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。

S A B

(～600字程度まで) ※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。

各学科とも、1年次に初年次教育にあたる「基礎ゼミ」（日本文学科のみ「大学での国語力」「ゼミナール入門」として実施。以下、これらを「基礎ゼミ」等と略す）や概論科目を、2年次以降、より専門性の高い科目を開設している。また、2～3年次ないし3～4年次に「ゼミナール」「演習」（各学科で名称を異にするため、以下、最も代表的な呼称である「ゼミナール」「演習」と称す）を開設し、調査・研究・発表を主体とした教育を実施している。4年次には全学科で「卒業論文」を必修として課すことにより、論理的な思考力・表現力の養成に力を入れている。各科目は、必修科目・選択必修科目・選択科目・自由科目（心理学科のみ、必修科目・学科基礎科目・展開科目・自由科目と称す）の系列に分類され、学科の専門領域を幅広くかつ体系的に学ぶことができるようになっている。また、1年次より学科の専門科目とILAC科目の双方が学べるよう配慮されている。

なお、各学科のカリキュラムの順次性・体系性の特徴は以下のとおりである。

【哲学科】

ゼミ形式の授業として、1年次に「基礎ゼミ」、2年次に「基礎演習」、3・4年次に「哲学演習」を開設し、4年間を通じて段階的に継続した能力形成が可能なカリキュラムとなっている。また、1・2年次に概論科目、ILACを履修したあと、2・3年次に特殊講義、選択科目の履修を通じて視野の拡大を図り、広い教養に支えられた専門性の証としての「卒業論文」の執筆につなげている。

【日本文学科】

1年次春学期に国語基礎力育成のための「大学での国語力」、秋学期にゼミ教育への導入としての「ゼミナール入門」を開設している。2年次からは文学・言語・文芸の3コース制をとり、学生は「ゼミナール」の所属によって所属コースが決まる。各コースのカリキュラムは、共通の必修科目3科目（1年次ないし2年次以降開設）を土台に、コース別必修科目2

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

科目を柱とし、さらに選択必修、選択、自由科目を配することにより体系化されており、卒業論文・卒業製作につなげている。

【英文学科】

1年次には初年次教育として「基礎ゼミ」を開設するほか、英米文学、英語学、言語学の基礎的な講義科目を履修可能としている。2年次以降、専門的内容をもつ講義科目や、英語力の集中的な育成を図るための英語表現演習科目を開設している。また、2年次春学期にはゼミにおける専門研究への導入のため、「2年次演習」を開設している。3年次からは英米文学、言語学、英語学、英語教育学等の各分野のゼミを開設し、卒業論文執筆に向けた指導を行っている。

【史学科】

1年次に導入科目として「基礎ゼミ」を開設するほか、日本史・東洋史・西洋史の各概説および各序説を開設している。2年次には、基本的な方法論の習得のため「史学概論」「考古学概論」を開設している。2年次以降、日本史・東洋史・西洋史の3専攻制をとり、専攻系（時代史）講義科目で専攻分野の知識を深化させ、より専門性の高い特講系講義科目への連絡を図っている。さらに、研究方法習得のための演習（ゼミ）と、史資料の扱い方、外国語論文読解力養成のための実習系科目を開設している。これらの科目を2・3年次に履修することで、4年次の卒業論文執筆に結びつけている。

【地理学科】

1年次に「基礎ゼミ」のほか、地理学の体系と方法論の基礎を習得するための「地理学概論(1)・(2)」「地理実習(1)・(2)」を開設している。2年次からは選択必修科目、選択科目によって多岐にわたる知識、方法論を学び、習得した方法論を「現地研究」(フィールドワーク)において実践する。2017年度入学生以降は3・4年次における「演習」の履修により、4年次の「卒業論文」につなげる編成をとる。

【心理学科】

認知系科目群と発達系科目群を柱に、体系的な教育課程を編成している。1年次には学科基礎科目を設置し、2年次からは専門性の高い学科展開科目を比較的自由に履修できるように設置している。また、1年次には初年次教育としての「基礎ゼミ」、心理学への興味を高め、基礎的なスキルを習得するための「心理学基礎実験Ⅰ・Ⅱ」、2年次には研究論文の読み方や実験方法を学ぶ「演習Ⅰ・Ⅱ」、3年次以降は心理学分野での研究活動を一人で行うことにより、それまでに習得した知識・技能を活用する方法を学ぶ「研究法Ⅰ・Ⅱ」を設置し、最終的に4年次の「卒業論文」につなげられるように編成している。

【2017年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・2017年度にすべての学科がカリキュラムマップ、カリキュラムツリーを完成させ、公開することができた。
- ・地理学科において2017年度新入生から、選択必修科目である演習の履修年次を3年次に引き上げ、いくつかの専門科目の履修年次を2年次に引き下げることとなった。これにより、4年次の卒業論文に向けて、より多くの講義・実習による専門知識の習得と準備が早い段階で可能になるとともに、演習における少人数教育の実施による教育効果が期待される。また、4年次の卒業論文の製作に向けて、教育効果が期待される。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・<http://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/curriculum/index.html>
- ・『文学部履修の手引き』『文学部講義概要(シラバス)』

③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。

S A B

(~400字程度まで) ※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。

各学科とも幅広く深い教養を習得することと、学科の専門性の高い知識・方法を習得することを両立し、総合的な見識や判断力を養成することを重視している。そのため、卒業所要単位数132単位のうち、44単位をILAC科目より修得することが定められている。ILAC科目は0群、1群(人文科学分野)、2群(社会科学分野)、3群(自然科学分野)、4群(外国語)、5群(保健体育分野)から構成されており、群ごとに必要単位数を設定することにより、幅広い領域の教養を身につけることができるよう配慮されている。また、ILAC科目の中には、教養をより発展的に学ぶ科目群として「総合科目」も設けられており、ここで修得した単位は専門科目のうち、自由科目として認定されている(哲学科・日本文学科・英文学科では「総合科目」の一部は専門科目のうち、選択科目として位置づけられている)。加えて、文学部内では学科間で科目の共有が行われているほか、3年次からは他学部・他学科公開科目も履修可能となっており、隣接する領域や他の専門領域をより深く学ぶ場が提供されている。

なお、文学部では2011年度より、社会倫理の涵養をめざし、「現代のコモンセンス」(2年次より)を開講していることも、特徴としてあげられる。

【2017年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- ・2017年度より市ヶ谷地区の新しい教養教育としてのILAC科目のカリキュラムが施行された。ILAC科目では、0～5群の各科目群をそれぞれ基盤科目・リベラルアーツ科目に分類し、基礎的内容と応用的な内容の双方を学ぶことが定められている。さらには、2018年度より「教養ゼミ」の開設も決定しており、リベラルアーツを深く学ぶ制度も準備されている。
- ・これまで成績優秀者の他学部科目履修制度の適用者を成績上位2.5%としていたが、2018年度より、これを成績上位5%に拡大することを決定した。成績優秀者に限定された制度ではあるが、より多くの学生にとって、学部を超えた幅広い学びが実現されることになる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』『LAC科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目 講義概要（シラバス）』
- ・2017年度第6回文学部定例教授会議事録

④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。

S A B

(～400字程度まで) ※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。

学士課程教育への円滑な移行に必要な初年次教育として、哲学科・英文学科・史学科・地理学科・心理学科ではILAC科目の中に「基礎ゼミ」を開講し、日本文学科では専門科目の中に「大学での国語力」「ゼミナール入門」を開講している。これらの科目では、文章読解、ディベート、プレゼンテーション、レポート作成、資料探索技術等を扱い、大学での学びに必要な基礎的な能力を身につけることがめざされている。

一方、高大接続に関しては、法政大学高等学校3年生を対象に一部の専門科目の聴講を認めている（ただし、まだ実績はない）。

なお、上記以外の学科固有の取り組みとして、以下のものがあげられる。

【史学科】

史学科では日本史・東洋史・西洋史を広く学ぶカリキュラムが設定されているため、高等学校までの日本史・世界史の学習状況を考慮し、必ずしも学習が十分でない者を主な対象として、2017年度から各分野の通史を1 Semesterで学ぶ「日本史序説Ⅰ・Ⅱ」「東洋史序説」「西洋史序説」を開講し、他学科にも公開した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』『文学部講義概要（シラバス）』『2017年度ILAC科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目 講義概要（シラバス）』
- ・2017年度第9回教学改革委員会（拡大）議事録

⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。

S A B

(～400字程度まで) ※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

ILAC科目に英語および諸外国語科目を設置し、必修科目を指定している。また、英語強化プログラム(ERP)、グローバル・オープン科目、交換留学生受入れプログラム(ESOP)のうちの英語開講科目、「短期語学研修」「国際ボランティア」「国際インターンシップ」が履修可能になっている。これらの科目は専門科目のうち、自由科目として認定されている(英文学科では一部、選択必修科目に認定されている)。

なお、上記以外の各学科における取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

2011年度より「国際哲学特講」を開講している。本科目ではハイデルベルク大学(ドイツ)、ストラスブール大学(フランス)と提携し、スカイプを用いた遠隔授業とアルザス欧州日本学研究所における合同授業を実施している。海外の大学の学生と交流・議論すると共に、現地の文化に直接触れることで、異文化への関心の喚起、自国文化の見直しを促し、学生の国際的な意識の涵養に取り組んでいる。

【日本文学科】

日本語・日本文学に関心をもつ留学生を積極的に受け入れるとともに、中国文学に関する科目をゼミナール・選択必修科目・選択科目において開講し、日本文学を相対化してとらえる視点を提供している。

【英文学科】

米国のフロントボン大学の秋学期SA(長期)、アイルランドのユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリンの夏季SA(短期)と秋学期SA(長期)という3種のプログラムからなる学科独自の派遣留学制度(SA)を設け、短期SAについては1年次からの参加を積極的に勧めている。プログラム終了後には毎年SA報告会を開いている。また、留学先で修得した単位については、学科・学部の審議を経たうえで、SA認定科目として認定している。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【史学科】

外国史の科目では多様な地域を対象とするとともに、東洋史専攻・西洋史専攻の各演習では中国語・英語の原書を読むことを義務づけている。さらに、中国の龍門石窟、復旦大学文物與博物館学系、少林寺と学術協定を締結し、学生の国際性の涵養に努めている。

【地理学科】

外国語を通じて地理学を学ぶための「外書講読」を開講するとともに、世界の各地域に対応した「世界地誌」等を開講し、学生の海外諸地域に対する理解を深めている。韓国・台湾をフィールドとする「現地研究」を実施する年もあり、学生自らが異文化を体験する機会を設けている。

【心理学科】

アジアからの多くの留学生を積極的に受け入れている。また、「演習 I」などの演習系科目や、「心理学英語 I・II」を通じて、英文学術雑誌の講読の促進や、国際的な場で発表できるだけの語学力の伸長に努めている。さらに、専任教員が主導して大学院入試を視野に入れた自主英語勉強会を定期的に開催し、授業外でも英語力の強化に取り組んでいる。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』『文学部講義概要（シラバス）』『ILAC 科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目 講義概要（シラバス）』
- ・『文学部英文学科 Study Abroad Program』（学生への配布資料）

⑥学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。

S A B

(～400 字程度まで) ※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

ILAC 科目の中に「キャリアデザイン入門」「キャリアデザイン演習」（ともに 1 年次）、「就業基礎力養成」（1～4 年次）を設置し、初年次よりキャリア教育を実施している。また、文学部では、学部共通科目として「文学部生のキャリア形成」（2 年次以上）を設置している点も、特徴としてあげられる。当該科目では、文学部生としての立場を生かしたキャリア形成への意識を高めるため、本学文学部卒業生による講義がオムニバス形式で実施されている。

なお、上記以外の各学科の取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

哲学科生に向けた「哲学科就職セミナー」を年 1 回開催し、キャリアセンター職員や卒業生などの講演を行い、就職活動を含め、キャリア形成に向けた情報提供と学生の意識向上を図っている。

【日本文学科】

「メディアと社会」「編集理論 A・B」「編集実務 A・B」「表現と著作権」を開設し、出版業界への就職を希望する学生に向けたキャリア教育を実施している。また、日本文科学学生委員会と共催で「日文科生のための就活力」を開き、3 年生等への情報提供を行っている。

【史学科・心理学科】

「基礎ゼミ」においてキャリアセンター職員によるガイダンスを実施し、学生が 1 年次よりキャリア形成に向けた意識を高める取り組みを行っている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』『文学部講義概要（シラバス）』『ILAC 科目／市ヶ谷基礎科目・総合科目 講義概要（シラバス）』
- ・哲学科 HP (<https://philos.ws.hosei.ac.jp/>) に「哲学科就職セミナー」案内掲載。

3.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S A B

【履修指導の体制および方法】 ※箇条書きで記入。

- ・各学科専任教員：4 月にオリエンテーション（1 年次生対象）、在学生ガイダンス（2 年次以降の学生対象）を実施。
 - ・学務部学部事務課文学部担当：4 月に学部ガイダンス（1 年次生対象）を実施。
- そのほか、各学科の取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

- ・新入生に対して、履修・学習状況等を確認しながら、専任教員が面接を行い、履修上のミスマッチが生じないよう学習上の問題点の早期発見と適切な対応に努めている。
- ・4 月に 4 年生を対象に卒論ガイダンスを実施。

【日本文学科】

- ・学科内留学生サポート小委員会による「1 年次留学生履修相談会」を開催している。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・新入生を対象とした懇談会として、4月に新入生歓迎会を実施している。同時にオフィスアワーの利用促進を図るため、研究室案内も実施している。
- ・1年次後半にゼミナール選抜に関する説明会を開催している。
- ・コースや研究分野に対応した5つの履修モデルを日本文学科公式サイトで公開している。
- ・4年次への進級や卒業履修要件の充足を目指し、履修状況の確認を学生各自で行う「3年次履修チェックリスト」を日本文学科公式サイトで公開している。

【英文学科】

- ・5月に全専任教員が1年生全員を対象にしたグループ単位の「新入生面談」を行ない、履修状況を把握し、必要に応じて個別に追跡調査を実施している。
- ・11月～12月に、1年生を対象に「2年次演習」説明会、2年生を対象にゼミ制度説明会、3年生を対象に卒論説明会を実施している。

【史学科】

- ・1年生には基礎ゼミと、5月に行われる全ての1年生を対象とした新入生面談とにおいて、2年生以上にはそれぞれが所属する演習（ゼミ）において、専任教員が直接、履修上の注意を行うとともに、学生からの履修上の相談にも応じている。
- ・1年生には、11月にゼミ説明会を開催し、ゼミ選択・履修の相談にも応じている。

【地理学科】

- ・新入生を対象に5月～6月にかけて、全教員に学生を振り分けて個別に「新入生面談」を行い、学習の状況や生活について相談を受け、適宜学科会議で情報共有し、対応を検討している。
- ・秋学期に行っている地理学科オリジナルの卒論ガイダンスにおいて、卒業論文指導教員の選択手続の方法や、卒論作成にかかわる具体的な要領について詳しく説明している。
- ・地理学科オリジナルの葉を配付し、文学部履修の手引きに書かれていない地理学科教員の詳しい紹介や取得できる資格などについて説明している。また、地理学科ウェブサイトにおいて、葉の内容に加え、最新の情報についても提供している。

【心理学科】

- ・1年生に対しては、専任教員によるグループ面談、心理学科の上級生で構成するピアサポーターによる履修講習会を通じて履修指導を行っている。学科のカリキュラムなどを解説した独自の資料もオリエンテーションで配付している。
 [注] ピアサポートシステムとは、ピアカウンセリングを活用したもので、互いの人間的成長能力を信じ、「支援する存在」でもあり「支援される存在」でもあるという互恵性を高めることによって、学習環境をポジティブな風土にし、個々の学生の能力を伸ばすシステムである。ピアサポーターは、現在30名近くおり活発な活動を行っている。
- ・2～4年生に対しては、学科のカリキュラムを解説した独自の資料を作成し、在学生ガイダンスで配付している。
- ・2年生に対しては、ピアサポーター主催のゼミ説明会も行っている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

【日本文学科】 留学生サポート小委員会履修相談資料

http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/?page_id=1153

<http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2016/04/0602e18f0b2205f5eecc19dcead869fe.pdf>

【英文学科・史学科】 在学生ガイダンス配付資料

【地理学科】 『地理学科の葉』、<http://www.hosei.ac.jp/geogr/geo-net/>

【心理学科】 心理学科新入生オリエンテーション配付資料、心理学科在学生ガイダンス配付資料

②学生の学習指導を適切に行っていますか。

S A B

(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。

すべての専任教員がオフィスアワーを設け、面会時間・場所を『文学部講義概要（シラバス）』に公開し、個々の学生への学習相談に対応している。

また、各学科とも1年生に対しては「基礎ゼミ」等において、2年生以上に対しては「ゼミナール」「演習」を通じて、担当教員による学習指導が行われている。

さらに、4年生に対しては、必修の卒業論文を通じて、指導教員による研究指導が行われている。その指導計画については、『文学部講義概要（シラバス）』において公開されている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部講義概要（シラバス）』

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>（～400字程度まで）※取り組み概要を記入。</p> <p>履修登録単位数の上限を、再履修単位を含めて49単位と定め、計画的な単位履修の指導に加え、学生が授業時間外の学習時間を確保できる方策をとっている。個別の科目については、担当教員が各回の「授業計画」「授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）」「参考書」をシラバスに記載し、予習・復習の時間を設けるよう適切に指示・指導している。また、講義科目においては適宜レポート等を課して授業外学習の時間を増やすほか、小テストの実施などを通して予習・復習の促進も図られている。「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」においては、レポート執筆や口頭発表に向けた調査・研究を授業外に実施するほか、必要に応じて学生同士のサブゼミも開催されている。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部履修の手引き』『文学部講義概要（シラバス）』</p>	
④1年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定を行っていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>【履修登録単位数の上限設定】※1年間又は学期ごと、学年ごと等に設定された履修単位数の上限を記入。</p> <p>履修登録単位数の上限は、各年次とも卒業所要単位（専門科目・ILAC科目）のうち、49単位までと定められている。</p> <p>【上限を超えて履修登録する場合の例外措置】※履修登録単位数の上限を超えて履修できる場合、制度の概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職科目・資格科目を履修する場合、各年次の登録総合計は、1年次60単位まで、2～4年次68単位までと定めている。 ・成績優秀者の他学部科目履修制度においては、8単位まで他学部科目の履修が可能であり、かつ上限を超えて履修することが認められている。 ・2018年度より設けられる集中特別授業期間（セッション）に開講される科目は、上限を超えて履修することを可とすることが決定されている。 <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部履修の手引き』 ・「成績優秀者の他学部科目履修制度 履修の手引き【文学部生用】」 ・2017年度第9回文学部定例教授会議事録</p>	
⑤教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>【具体的な科目名および授業形態・内容等】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」を中心に、授業においてアクティブラーニングを積極的に導入している。 ・大教室における講義科目でも、リアクションペーパーや授業支援システム等を活用した双方向型の授業形態を積極的に導入している。 <p>そのほか、各学科の特色ある取り組みは以下のとおりである。</p> <p>【哲学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一部の「哲学演習」では、受講生の発表をパワーポイントによるプレゼンテーション形式で実施し、哲学の内容を概念図に変換する能力を養成している。 <p>【日本文学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「編集実務A・B」ではDTPソフトを使用し、書籍や雑誌の誌面デザインを行う。小冊子の制作や課題のプレゼンテーションを行う。 <p>【英文学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「英語表現演習(Speaking)」「英語表現演習(Writing)」のうち6つ（入学者数が多い学年については8つ）をクラス指定の授業として設定し、クラス指定制度の徹底化を図り、履修希望学生全員に受講を保証している。 <p>【史学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「基礎ゼミ」「演習」のほか、実習系科目群のなかで、PBL、アクティブラーニング形式の授業を実施している。 <p>【地理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「現地研究」の実施概要を掲示し、学科ウェブサイトで公開している。 ・ECO-TOPプログラムでは、企業、自治体、NPOでのインターンシップを実施している。 <p>【心理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業における先進的取り組みについては下記根拠資料にまとめている。そのほか、2016年度からは「心理学測定法I」と「演習II」で、新たにビデオ教材を用いた反転授業を取り入れている（情報メディア教育研究センターとの共同事業）。 	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部講義概要（シラバス）』</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【地理学科】『地理学科の栞』、http://www.hosei.ac.jp/geogr/geo-net/	
【心理学科】「2015年度 心理学科 アクティブ・ラーニング、PBL 導入事例」報告書（2016年度心理学科会議資料）	
⑥それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>（～400字程度まで）※どのような配慮が行われているかを記入。</p> <p>各学科とも「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」においては、少人数教育を徹底するため、履修者の選抜や科目間での履修者数の調整等を行っている。また、ILAC科目の英語においては1授業あたり24名を履修者の上限とし、諸外国語においても1授業あたりの履修者の上限を設けている。</p> <p>そのほか、各学科では以下のような配慮を行っている。</p> <p>【日本文学科】</p> <p>必修科目（日本文芸学概論・日本語学概論・日本文芸史Ⅰ）・コース別必修科目（文学概論・日本文芸史Ⅱ・日本語史・日本文法論・日本文章史・文章表現論）では、昼間・夜間に同じ授業を1コマずつ開講し、履修者が最大でも150名程度になるよう配慮している。</p> <p>【史学科】</p> <p>実習系の「日本考古資料学」「日本近世史料学」等では、学生の専攻を優先して履修者を選抜することで、規模の適正化を図っている。</p> <p>【地理学科】</p> <p>実験・実習科目において、履修者数が10名を超える場合、TA（教育補助員）を1名配置し、円滑な実験・実習が行えるようにしている。また、必修科目の「地理実習（1）/（2）」や選択必修の地学実験（1）/（2）」では、履修者を二つのクラスに分けて春秋で（1）/（2）の履修の順番を代えて受講することで実験室の収容数以内で実習できるようにしている。</p> <p>【心理学科】</p> <p>「心理学基礎実験Ⅰ・Ⅱ」「心理学測定法Ⅰ・Ⅱ」「心理検査法Ⅰ・Ⅱ」「心理統計法実習Ⅰ・Ⅱ」「情報処理技法Ⅰ・Ⅱ」においてはクラス指定制をとり、1授業あたりの履修者が30～40名程度になるように調整している。</p>	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・『文学部講義概要（シラバス）』</p> <p>【哲学科】「哲学演習」の受講者制限について（配付プリント）</p> <p>【日本文学科】ゼミ説明会配付資料</p> <p>【心理学科】「心理学科在学生ガイダンス配付資料」</p>	
⑦シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>【検証体制および方法】※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。</p> <p>・教学改革委員会委員（地理学科では学科内で選出されたシラバスチェック委員）によるシラバス第三者チェックの実施、および学科内・教授会への報告。</p> <p>そのほか、各学科における取り組みは以下のとおりである。</p> <p>【英文学科・心理学科】</p> <p>・シラバスチェックを全専任教員によって実施している。</p> <p>【地理学科】</p> <p>・地域調査士、GIS学術士の資格科目に関しては、必須のキーワードがシラバスに掲載されているかを担当教員がチェックしている。</p>	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・2017年度第7回教学改革委員会議事録、2017年度第8回文学部定例教授会議事録、同配付資料「2018年度シラバス第三者チェックの実施について（依頼）」</p> <p>・2017年度第9回教学改革委員会（拡大）議事録</p>	
⑧授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>【検証体制および方法】※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。</p> <p>・「学生による授業改善アンケート」による確認。</p> <p>・一部の授業において相互授業参観を実施。</p> <p>・教員個々において、リアクションペーパー等を通じて学生の理解にもとづく、授業の適切な進行を心がけている。</p> <p>そのほか、学科における固有の取り組みは以下のとおりである。</p> <p>【史学科】</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・第2回特別学科会議において、FD推進センターが提供する「振り返りシート」を利用して、専任教員担当授業についてはシラバスの内容と齟齬がないことを確認し、授業スケジュールがシラバス通りには進まなかったケースについて、その理由の検証を行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2017年度第9回教学改革委員会（拡大）議事録、同配付資料「2017年度 教員による授業相互参観実施状況報告書」
- ・2017年度文学部史学科第2回特別学科会議議事録

3.5 成績評価と単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。

S A B

【確認体制および方法】※箇条書きで記入。

- ・学期ごとに、すべての専任・兼任教員に成績評価・単位認定基準を通知している。
- ・すべての科目の成績評価・単位認定基準は『2017年度文学部講義概要（シラバス）』に公表されている。
- ・GPCA集計表を通じて、すべての専任教員が成績評価の適切性を確認している。
- ・学生に対して成績調査の申請機会を保証し、教授会では必要に応じて成績訂正について審議している。そのほか、各学科における取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

- ・「哲学演習」として開設されている11の演習科目をはじめ、ゼミ科目では、単位認定および成績評価の基準を学科内で統一している。

【日本文学科】

- ・オムニバス科目「日本文芸学概論A・B」（必修科目）の成績評価は、学科会議の審議事項としている。
- ・「大学での国語力」「ゼミナール入門」では、各クラスで成績評価の割合に不均衡が生じないように、担当教員で協議のうえ、成績を決定している。

【英文学科】

- ・「基礎ゼミ」では、複数クラス間で成績評価に不均衡が生じないように、担当教員で協議のうえで成績を決定している。
- ・卒業論文の評価基準をあらかじめ公開している。

【史学科・心理学科】

- ・シラバス以外でも、卒業論文の審査基準を文書化し、あらかじめ公開している。

【地理学科】

- ・卒業論文の評価を全教員で協議のうえ決定している。

【心理学科】

- ・卒業論文の口述試験を学科全体の発表会形式で実施し、その成績を全教員が協議のうえ決定している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』『文学部講義概要（シラバス）』

【日本文学科】学科会議資料、「大学での国語力」「ゼミナール入門」検討会・反省会資料

【史学科】「史学科卒業論文の提出と評価について」「卒業論文作成心得」（卒業論文ガイダンス配付資料）

【心理学科】「法政大学人文科学研究科心理学専攻修士論文／文学部心理学科卒業論文評価表」

(<http://www.hosei-shinri.jp/psychology/documents/thesis-evaluation-form.pdf>)

②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。

はい いいえ

(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。

転編入者、派遣留学・認定海外留学・SA参加者等の他大学等における既修得単位は、当該大学のシラバス等を参照し、各学科の学科会議および教授会で審議し、認定を行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2017年度第1回文学部定例教授会議事録

③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。

S A B

(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。

厳格な成績評価を行うため、各科目では試験、レポート、口頭発表等にもとづく評価を実施し、その方法もシラバスを通じて告知されている。担当教員もそれを踏まえ、成績評価を行っている。また、GPCA集計表を通じて、すべての専任教員が成績評価の適切性を確認できる仕組みをとっている。

なお、講義科目におけるA+の付与は、認定単位のうち20%以内を目途とすることが、申し合わせられている（地理学科の「現地研究」においては、A+の付与は履修者の上位10%程度に収めることとしている）。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

そのほか、特定の科目の成績評価に対する厳正な方法については、前記 3.5①参照。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部講義概要（シラバス）』 ・2010 年度第 12 回文学部定例教授会議事録	
④学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
【データの把握主体・把握方法、データの種類等】 ※箇条書きで記入。 ・学生の就職・進学状況については、教授会においてキャリアセンターによる報告をすべての専任教員で共有することとしている。 ・その他、学科会議においても、学生の就職・進学状況について報告・確認がなされている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2017 年度第 3 回文学部定例教授会議事録	
3.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
【データの把握主体・把握方法・データの種類等】 ※箇条書きで記入。 ・成績分布については、執行部が学部別・学科別の GPCA 集計表を各学科に配付し、確認している。 ・進級・留級については、毎年 9 月の学科主任会議および 9 月・3 月の教授会の承認事項としている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2017 年度学科主任会議議事録、2017 年度第 5 回文学部定例教授会議事録、同配付資料「2017 年度 文学部卒業生数（9 月）について（報告）」 ・2017 年度第 11 回文学部定例教授会議事録、同配付資料「2017 年度 卒業生数（3 月卒業）および進級・留級者数について（報告）」	
②分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
（～400 字程度まで）※取り組みの概要を記入。 文学部では、各学科の専門分野における研究方法の習得と、それともなう課題発見・解決力、思考力、調査力、また、それらを説得力をもって発信するための文章力、プレゼンテーション能力を有する学生に対し、学位を授与する方針をとっている。そのため、「ゼミナール」「演習」ではレポートと口頭発表を課し、「卒業論文」では単位修得に必要な要件を定めている。 なお、上記以外の各学科の取り組みは以下のとおりである。 【哲学科】 哲学的な議論や主張ができるための正確な文章力の習得を重要な教育上の目標として、3～4 年次の演習授業の前提として 2 年次学生向けに「基礎演習」を実施し、レポート作成を通じた文章力の養成・指導に取り組んでいる。 【心理学科】 卒業論文の具体的な評価基準を『法政大学人文科学研究科心理学専攻修士論文／文学部心理学科卒業論文評価表』として学科の HP に公開し、研究の指導と論文の評価に活用している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部履修の手引き』『文学部講義概要（シラバス）』	
③具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
（～400 字程度まで）※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用等）。 学生の学習成果の把握・評価は、シラバスに明示したとおり、講義科目においては期末試験、レポートを通じて行われるほか、随時、小テストやリアクションペーパーを通じても行われている。「ゼミナール」「演習」においては口頭発表、討論、レポートを通じて行われている。また、文学部では卒業論文が必修であるため、4 年間の学習成果は論文本体および口述試験によって、把握・評価が可能となっている。レポート、口頭発表、卒業論文への取り組み、評価にあたり、ルーブリックの使用が広まりつつある。 なお、上記以外の学科固有の取り組みは以下のとおりである。 【地理学科】 教員免許、測量士補、ECO-TOP プログラム、地域調査士等の資格取得者数等の調査を毎年度実施している。	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>【心理学科】 個々の学生が取り組む卒論研究については、研究計画書を提出し、倫理審査を受けることを義務付けており、この段階で全教員が全学生の研究計画書を読んでいる。倫理審査の目的は研究計画の適切さを評価することにあるが、同時にこの仕組みは、研究対象や研究方法に関する理解度や計画書の作成技術など、個々の学生のそれまでの学習成果を把握するのにも役立っている。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『文学部講義概要（シラバス）』</p>	
<p>④学習成果を可視化していますか。</p>	<p>S A B</p>
<p>【学習成果可視化の取り組み】 ※取り組みを箇条書きで記入（取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等）。 各学科の取り組みは以下のとおりである。</p> <p>【哲学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> 卒業論文タイトル一覧の公表。 一部の「哲学演習」における卒業論文反省会の実施（卒論面接審査後に4年生が他の4年生及び3年生に向けて自身の卒論内容と執筆上の反省点等を報告）、卒論論集・卒論要旨集の作成。 一部の「哲学演習」では、ゼミ発表と配付資料、ゼミ活動をDVDに収録し、配付。 「国際哲学特講」では毎年の研修成果を学科ホームページ上で公開。 <p>【日本文学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> 優秀卒業論文・卒業制作を学科発行の学術雑誌『日本文学誌要』・文芸雑誌『法政文芸』で公表。 「ゼミナールレポート集」「卒業論文集」「創作作品集」を作成し、「ゼミナール」における学習成果を公表。 <p>【英文学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> 年度末発行の学内誌『SMILE』に卒業論文論題一覧を公表、さらに各分野の優秀論文を掲載。 学科生の団体 Links において、学生がゼミでの学習状況等を発表。 学科 SA 報告会において海外留学の成果を発表。 <p>【史学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学科内学会の雑誌『法政史学』に卒業論文の題名一覧を公表。 全国学会の主催する優秀卒業論文発表会への推薦（具体的には地方史研究協議会が主催する「日本史関係卒業論文発表会」）。 <p>【地理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学科と卒業生と学生で組織する学会が連携した卒業論文発表大会の実施。各ゼミ活動についてもポスターにて発表。 全国地理学専攻学生卒業論文大会へのエントリー。 『法政地理』への優秀卒業論文の投稿。 ECO-TOP 全体発表会、学内発表会への参加。 <p>【心理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> 卒業論文の発表会でのプレゼンテーションに加え、研究成果をA4判1ページの要旨としてまとめて配付するほか、法政大学心理学会の定期刊行物「法政心理学会年報」で公表。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>【哲学科】 https://philos.ws.hosei.ac.jp/ 【日本文学科】 『日本文学誌要』『法政文芸』 【英文学科】 『SMILE』『文学部英文学科 Study Abroad Program』（学生への配付パンフレット） 【史学科】 『法政史学』、http://chihoshi.jp/?cat=8（第58回日本史関係卒業論文発表会・2017年4月開催・於駒澤大学） 【地理学科】 『法政地理』、http://www.chiri.info/index.html 【心理学科】 「修士論文・卒業論文要旨集』『法政心理学会年報』</p>	
<p>3.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。</p>	
<p>①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。</p>	<p>S A B</p>
<p>(~400字程度まで) ※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

学期末に「学生による授業改善アンケート」を実施し、各教員がそれを授業内容にフィードバックすることで、授業内容とシラバスの整合性を、学生の学びの立場に立ってチェックする体制をとっている。また、毎年実施される「卒業生アンケート」の集計結果をすべての専任教員が教授会において把握する方策をとっており、その結果を教育課程、内容、方法の改善に役立てている。加えて、「学生モニター制度 グループインタビュー」を実施し、学生の意見・要望も聴きとることにより、教育課程、内容の改善に生かす方策もとっている。

また、各学科では学科会議やFDミーティングにおいて、学習成果の検証とそれにもとづく教育課程・内容・方法の改善について審議している。詳細は5.4参照。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2017年度第3回文学部定例教授会議事録
- ・2017年度第9回文学部定例教授会議事録、同配付資料「2017年度文学部学生モニター「モニタリング内容と今後の対応案」」

②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。

S A B

【利用方法】※箇条書きで記入。

- ・学生による授業改善アンケートの結果を各教員が生かし、そこから気づいたこと、授業改善に役立てたことを『文学部講義概要（シラバス）』のうち、「学生の意見等からの気づき」の項目で公表している。
- ・教学改革委員会および各学科の学科会議で、授業改善のための検討資料として利用することがある。
- ・必要時には、各学科が執行部より学科ごとの「自由記述欄」のデータの提供を受け、現状把握にあたることもある。
- ・ただし、現行のアンケートは評価・回答方法のあり方、回答率の低さなどから、教育課程や教育内容・方法の組織的改善のためには利用しにくいという声もある。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部講義概要（シラバス）』

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・教育課程の編成・実施方針にもとづき、「ゼミナール」「演習」「卒業論文」を必修とするほか、これらへの対応する基礎力を養成するための「基礎ゼミ」等を開講している。	3.3①②④

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

①方針の設定に関すること (3.1～3.2)

文学部では、修得すべき学習成果や諸要件が明示された学位授与方針を設定し、その水準に達した学生への「学士(文学)」の授与が遂行されている。

教育課程の編成・実施方針は、学生に期待する学習成果の達成を可能としている。なお学部と学科それぞれの方針に大きな乖離はないものの、その関連性を明示するため、たとえば各項目の順番において初年次教育から専門教育への階梯性を反映させるなど、ある程度の統一が望ましい。

教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針は『文学部履修の手引き』『文学部講義概要（シラバス）』、大学HPなどで適切に周知・公表されている。それら方針等の適切性と関連性の検証を行う会議体とプロセスは明らかであり、検証時期は固定化されていないものの、随時実施されている。たとえば2017年度は質保証委員会の指摘を受けて執行部より各学科へ3つのポリシーの検討が要請され、結果集約が行われたことは高く評価できる。

②教育課程・教育内容に関すること (3.3)

文学部が掲げる「教育課程の編成・実施方針」においては、いくつかの能力やスキル涵養のために具体的な科目（ゼミナール、演習、基礎ゼミ、卒業論文、市ヶ谷リベラルアーツセンター科目[以下ILAC科目]）が言及されている。同学部の教育課程にはそれらの科目が設置され、その内容は学位授与に値する能力育成に鑑み適切である。

カリキュラムの順次性・体系性は十分実現され、学部・学科全体で初年次から卒業までの全体像が把握でき、それが各

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

学科の学びにも反映されている。年次にふさわしい科目配当や必修・選択必修・選択・自由科目が系列化され、学科の専門領域を幅広く且つ段階的・複層的に学ぶことが可能となっている。

教養教育の観点からは、市ヶ谷キャンパスで提供されている ILAC 科目 44 単位の履修が義務づけられているほか、他学部・他学科公開科目などにより教養・判断力・人間性に於いて豊かで優れた人材育成が目指されている。

文学部の初年次教育への積極的な取り組みは評価できる。高大接続に向けては、法政大学高等学校 3 年生による一部専門科目の聴講が認められているものの、未だ実績に欠けるので状況の分析や対応策を検討することが望ましい。国際性の涵養については全学あるいは市ヶ谷キャンパスにて提供されている科目やプログラムの活用が行われている他、学科ごとに新たな試みが導入されており評価できる。こうした試みが学科の壁を越え、学部全体に波及することが今後期待される。

6 学科中 4 学科で展開されているキャリア関連のセミナーや科目、あるいは科目内のガイダンスは有用であり、さらに文学部共通科目として設置されている「文学部生のキャリア形成」は独自の取り組みとして評価できる。

③教育方法に関すること (3.4)

文学部では、1 年間の履修登録単位数の上限は一部例外を除き 49 単位と定められ、それに基づいて学生の履修指導および学習指導が適切に行われている。たとえば全ての学科で新生を対象とした面接や面談が実施され、履修状況や学習状況の問題点の早期発見が目指されている。2 年次以上の学生についてはゼミナールや演習、オフィスアワーが主な履修・学習指導の契機となる。また他学部には見られない独自の試みとして心理学科の「ピアサポートシステム」や日本文学科の「3 年次履修チェックリスト」公開があり、高く評価できる。授業時間外に求められる学習時間（予習・復習）はシラバスに記載されるほか各授業で予習・復習の促進が図られているが、今後とも実態の把握・分析に努め、有効かつ実質的な対応が求められる。

授業形態に関しては、一部の科目でアクティブラーニングや双方向型授業が導入されている。とりわけ心理学科では情報メディア教育研究センターとの共同事業としてビデオ教材を用いた反転授業が行われているので、その成果検証が期待される。

「基礎ゼミ」「ゼミナール」「演習」ならびに ILAC 語学科目については少人数教育が実現されており、学科によっては履修者数やクラス規模適正化のため、クラス指定制度や選抜、昼夜開講などの工夫がなされている。シラバスチェックは、英文学科と心理学科では学科所属の全専任教員、地理学科ではシラバスチェック委員、そのほかの学科は教学改革委員会委員が行っている。ただし授業がシラバスに沿って行われているかどうかは、「学生による授業改善アンケート」から当該項目がなくなっている以上、「振り返りシート」を活用している史学科を除き、実質的には相互授業参観のみの検証となり、手薄なので一層の対応が望まれる。

④学習成果・教育改善に関すること (3.5～3.7)

文学部の成績評価と単位認定は、成績調査の申請機会を学生に保証することで一定の適切性が確認されている。科目によっては単位認定および成績評価基準が統一され、担当教員で協議されるなど、個別の努力が認められる。だが成績と単位認定は個々の担当教員の責任において行われるとの前提に立ちつつも、これらについては学部全体の統一的な取り組みが期待される。

転・編入者、SA を含む留学者等の既修得単位の認定基準は設けられていないが、各学科の学科会議および教授会で慎重に審議・認定が行われている。

「GPCA 集計表」を通じて各教員はクラス単位の成績評価の相対的な適切性を確認できるほか、A+付与の割合を定めた全学的な申し合わせが遵守されている。今後は GPCA が極端に高い/低い科目についてその背景を確認するなど、厳格な成績評価と単位認定について、学部としてより組織的な方策の策定が望まれる。

学生の就職・進学状況については、「教授会」、「学科会議」、「キャリアセンター」の連携により、また成績分布は学部別・学科別の GPCA 集計表の配布により執行部や学科単位で確認され、進級や留級状況は学科主任会議や教授会の承認事項とすることで把握されている。ただし GPCA は成績評価のクラス平均値であり、学生の成績分布の定量的評価には、別途関連科目を含めた確認が望まれる。

文学部ではゼミナールや演習でのレポートや口頭発表、さらには卒業論文が学習成果を測定するための指標となっている。また学習成果を把握・評価するための方法として期末試験、レポート、小テスト、リアクションペーパー、そして 4 年間の学びの集大成としての卒業論文などがあげられている。学習成果の可視化という点では、全学科共通して卒業論文があげられるが、ほかにも学部全体としての取り組みが期待される。

学習成果の検証と、検証結果に基づいた教育・研究活動の改善に関しては教員個人に負うところが大きいですが、組織的には各学科で「学科会議」、「FD ミーティング」の開催を通じ改善について審議されている。授業改善アンケートは教学改革

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

4 学生の受け入れ

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

【学生の受け入れ方針】

文学部は、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、自己推薦入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試、グローバル体験公募推薦入試、英語外部試験利用入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試、国際バカロレア利用自己推薦入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学・理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 志望する学科の専門分野に深い関心を持ち、強い学習意欲がある。

<哲学科>

哲学科は、文学部全体の方針に準じ、各種の入学試験（※）を通して以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試、グローバル体験公募推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試、国際バカロレア利用自己推薦入試。

1. 大学での学習のための一般的基礎学力を有している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な学力・知識を有している。また、論理的に思考ができ、自分の意見を表現することができる。
3. 哲学に深い関心を持ち、強い学習意欲がある。

<日本文学科>

日本文学科では、文学部の方針に準じ、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。能力・資質を的確に判断して学生を受け入れるため、多様な入試経路を用意し、日本文学科で学ぶにふさわしい者に広く門戸を開放する。

※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、自己推薦入試、社会人入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試、グローバル体験公募推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学・理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 日本の文学・言語・芸能について深い関心を持ち、それらの研究や文芸創作に必要な、知識・読解力・思考力・表現力全般にわたる、より多様でより奥深い人間的な学力・資質を有している。

<英文学科>

英文学科では、文学部の方針に準じ、各種の入学試験を通して、以下の点を重視し、一つの固定した視点にとらわれずに様々な視点から物事を学ぼうという意欲と能力のある受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、英語外部試験利用入試、大学入試センター試験利用入試、付属校推薦入試、指定校推薦入試、グローバル体験公募推薦入試、国際バカロレア自己推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学・理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 英語への関心、英語文学と英語圏文化への興味をもっている。
5. 外国語教育や言語理論の研究に必要な科学的思考を養う意欲を持っている。

近年採用した国際バカロレア自己推薦入試では、とりわけ、一定の能力を持ちつつ多様な個性をそなえた受験生の入学を認めている。

<史学科>

史学科は、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学・理科等について卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 史学科の専門分野に深い関心をもち、強い学習意欲がある。

<地理学科>

地理学科は、各種の入学試験（※）を通して、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試、自己推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語、外国語、地理、歴史、公民、数学、理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要とされる基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 地理学科の専門分野に深い関心をもち、強い学習意欲がある。

<心理学科>

心理学科では、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、大学入試センター試験利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 心理学科の専門分野に深い関心をもち、強い学習意欲がある。

①求める学生像や修得しておくべき知識等の内容・水準等を明らかにした学生の受け入れ方針を設定していますか。

はい いいえ

4.2 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。

はい いいえ

(~200 字程度まで) ※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

各種入試における合格者の決定は、執行部（入試委員）と入学センターおよび担当理事が協議し、慎重に行っている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

また、特別入試の合格者の決定は、学科とも協議したうえでやっている。定員の超過・未充足が生じないように努めているが、全国的な受験動向の変動の影響を受け、2016年度は学部全体で大幅な定員超過を来した。2017年度はその反省のもと、より慎重に合格者の決定を行ったが、学部全体の定員超過はなかったものの、一部学科において定員超過を来した。入学定員の管理については、今後も引きつづき慎重に行っていく必要があるとの認識をもっている。なお、入学定員・収容定員の充足状況は、教授会で報告され、すべての専任教員に把握されている。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

・2017年度第1回文学部定例教授会議事録、同配付資料「2017年度入学者手続き状況（最終）」「入学定員超過率（2014～2017年度）」

定員充足率（2013～2017年度）

（各年度5月1日現在）

種別\年度	2013	2014	2015	2016	2017	5年平均
入学定員	655名	655名	655名	655名	655名	
入学者数	651名	700名	627名	801名	707名	
入学定員充足率	0.99	1.07	0.96	1.22	1.08	1.06
収容定員	2,470名	2,520名	2,570名	2,620名	2,620名	
在籍学生数	2,846名	2,867名	2,834名	2,950名	2,990名	
収容定員充足率	1.15	1.14	1.10	1.13	1.14	1.13

※1 定員充足率における大学基準協会提言指針

【対象】

- ①学部・学科における過去5年間の入学定員に対する入学者数比率の平均
- ②学部・学科における収容定員に対する在籍学生数比率

【定員超過の場合】※医学・歯学分野は省略

提言	努力課題	改善勧告
実験・実習を伴う分野 (心理学、社会福祉に関する分野を含む)	1.20以上	1.25以上
上記以外の分野	1.25以上	1.30以上

【定員未充足の場合】

提言	努力課題	改善勧告
すべての分野共通	0.9未満	0.8未満

※2 定員充足率における私立大学等経常費補助金不交付措置の基準

年度	～2015	2016	2017	2018～
入学定員超過率	1.20以上	1.17以上	1.14以上	1.10以上
収容定員超過率	1.40以上	1.40以上	1.40以上	1.40以上

4.3 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

①学生募集および入学者選抜の結果について定期的に検証を行い、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。

S A B

(～400字程度) ※検証体制および検証方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

学生募集および入学者選抜の結果については、毎年、教授会、入試小委員会（各学科より1名選出される委員と教授会主任によって構成）、各学科の学科会議で検証される。その際、入学者の入試経路別 GPA 平均値等のデータも検討資料に加え、各種入試の定員、選抜方法の改善、指定校推薦入試の依頼校の見直し等を必要に応じて行っている。

なお、上記以外の学科固有の取り組みは以下のとおりである。

【英文学科】

近年導入した「英文学科グローバル体験公募推薦」制度によって入学した学生の学習状況をフォローし、学科会議で報告して全員で情報を共有している。

【2017年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基本的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2019年度外国人留学生入試（前期日程）より、地理学科を除く各学科で日本留学試験・総合科目120点以上とする出願要件を導入することを決定した（地理学科では導入済み）。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2017年度第3回文学部定例教授会議事録、同配付資料「入学経路別・男女別卒業生成績表」
- ・2017年度第9回文学部定例教授会議事録、同配付資料「2019年度入試制度変更点について」

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

文学部は、求める学生像や基礎知識の修得、関心・意欲の在処を明示した学生の受け入れ方針を学部としても学科としても設定している。定員に関して2015年度までは適正な入学者数を維持してきたが、2016年度は定員充足率が1.22となった。定員管理の厳格化により2017年度入学者数は適正水準になったものの、一部学科において定員が超過した。今後も合格者数の決定にはいっそうの慎重さをもって臨むことが求められる。

学生募集や入学者選抜の結果は各種会議を通して検証の機会が設けられるとともに、有効な検証資料に基づく改善等の措置が様々に取られている。2017年度には先行する地理学科に続き、他の5学科でも「外国人留学生入試（前期日程）」における新たな出願要件導入（2019年度より）が決定された。今後ともきめの細かい対応を期待したい。

5 教員・教員組織

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

【求める教員像および教員組織の編制方針】（2011年度自己点検・評価報告書より）

学部・学科の理念を十分に理解した上で、学生一人一人に目の届くきめの細かい教育を行ない、かつ、独創的で最先端の研究に従事できる教員が求められる。同時に教員は、学部・学科運営にも積極的に関わることも重要である。

教員組織においては、年齢、性別、国籍、専門分野等のバランスに留意し、理念を実現するのに十分な教育・研究・指導が可能となる編制を目指す。

①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。

はい いいえ

【根拠資料】※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。

- ・「文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」「文学部人事委員会細則」および各学科「人事に関する内規」

②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在をどのように明示していますか。

【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】※箇条書きで記入。

- ・学部執行部の構成：学部長1名（教授会構成員の投票による選出）、教授会主任・副主任各1名（学部長の委嘱、教授会の承認）により構成される。
- ・学部執行部の役割：学部長は教授会を代表し、文学部教授会規程第3条に定められた事項の審議を行うべく、教授会を招集する。教授会主任は学部長を補佐し、学部長に支障のある場合には、その職務を代行する。教授会副主任の職務等は、主任に準ずる。
- ・各学科：学科の運営を行うため、学科主任を置く。各学科では所属する専任教員を下記基幹委員会委員をはじめとする学内各種委員に選出するほか、学科内の教育・研究上必要な業務、全学の入試業務等の担当者を選出し、全学・学部・学科の運営にあたることとしている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・基幹委員会名称：人事委員会、紀要委員会、留学規定委員会、資料室委員会、教学改革委員会、入試小委員会、広報小委員会、文学部 IT 委員会、文学部質保証委員会、文学部共通科目運営委員会ほか。

【明示方法】※箇条書きで記入。

・「文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」において明示している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」「文学部各種委員会一覧」

5.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。

はい いいえ

(～400 字程度まで) ※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性、国際性、男女比等の観点から教員組織の概要を記入。

各学科とも専門分野等のバランスに留意し、カリキュラムに対応した専任教員の体制を組織している。また、必要に応じて兼任・兼担教員も配置し、より網羅的できめ細かな教育活動が行える体制を確立している。

なお、各学科におけるカリキュラムと専任教員体制の対応は以下のとおりである。

【哲学科】

古代ギリシャ哲学から、近代の英米系・フランス系・ドイツ系の哲学・倫理学、そして、現代の言語分析哲学、哲学的解釈学、法哲学、数理哲学、さらに社会思想、日本思想、東洋思想、比較文化にいたるまで、幅広い学問分野を網羅するため、古代ギリシャ哲学 1 名、英米系哲学 1 名、フランス系哲学・思想 2 名、ドイツ系哲学・思想 5 名、数理哲学 1 名、法哲学 1 名、比較文化 1 名の体制をとっている。

【日本文学科】

専任教員全 15 名のうち、文学コース 11 名、言語コース 2 名、文芸コース 2 名という配分となっている。学生の各コースへの所属を示すゼミナールの数では文学コース 12、言語コース 4、文芸コース 5 となり、カリキュラムの体系性にふさわしい教員組織である。

【英文学科】

専任教員 14 名のうち、専門科目を中心に担当する教員が 10 名、ILAC 科目を中心に担当する教員が 4 名である。また分野的には、英米文学 6 名、英語学・言語学 4 名、英語教育学 1 名、比較文化 1 名、ドイツ文学・比較文学 2 名という配分である。

【史学科】

日本史分野では、5 名の専任教員（考古学・古代史・中世史・近世史・近現代史）を配置している。東洋史分野では、従来からの 2 名の教員（文献史料・物質資料各 1 名）と 2018 年度採用の任期付教員 1 名（東南アジア史）の計 3 名の専任教員を配置している。西洋史分野では、3 名（前近代史 2 名・近現代史 1 名）の専任教員を配置している。

【地理学科】

総合科学として幅が広い地理学の領域をカバーするべく、人文地理学・自然地理学それぞれにおいて専門分野のバランスに留意した教員組織としている。多くの専門科目を他学部公開科目とすること、教員が教養科目（ILAC 科目・総合科目）を分担することで、他学部・他学科の学生と教員が接触する機会を多く設定し、教員の価値観・視野が狭窄なものとならないよう工夫している。

【心理学科】

心理学科のカリキュラムは、「認知」と「発達」という心理学科独自の二領域を柱に据えた編成に特徴がある。このカリキュラムの運用を維持するため、「認知」「発達」の二領域を広くカバーできる教員組織の整備が実現されている。具体的には、知覚、生理、発達、教育、学習、行動、犯罪、言語、スポーツ、健康といった分野を網羅している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・『文学部講義概要（シラバス）』

②教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。

はい いいえ

(～400 字程度まで) ※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。

哲学・日本文学・英文学・史学・地理学・心理学から成る文学部の 6 学科体制は、大学院人文科学研究科の 6 専攻体制に対応し、学科と専攻の教育上の連携は十分図られている。加えて、哲学・日本文学・英文学・史学・地理学の 5 専攻は国際日本学インスティテュートを組織し、17 名の文学部専任教員が専担教員として同インスティテュートに所属している。その結果、文学部各学科の教員の約 9 割以上は、人文科学研究科の各専攻および国際日本学インスティテュートに所属して、学部・大学院の教育にあたっている。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・『大学院要項』

2017年度専任教員数一覧

(2017年5月1日現在)

学部(学科)	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教 員数	うち教授数
文	56	11	3	4	74	40	21

専任教員1人あたりの学生数(2017年5月1日現在):40.4人

③特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。

はい いいえ

【特記事項】(～200字程度まで)※ない場合は「特になし」と記入。

学部全体で見た場合、専任教員の年齢構成は適切である。一部の学科において51歳以上の教員に偏る傾向が認められるが、各学科とも今後の新規採用人事において、年齢構成に配慮した採用を心がけるとの意識をもっている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

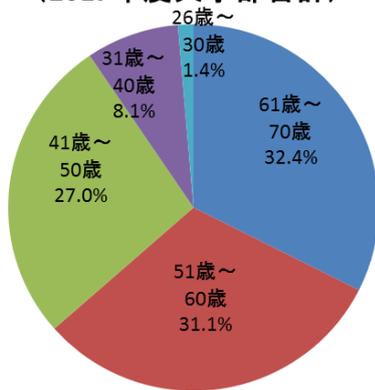
・特になし

年齢構成一覧

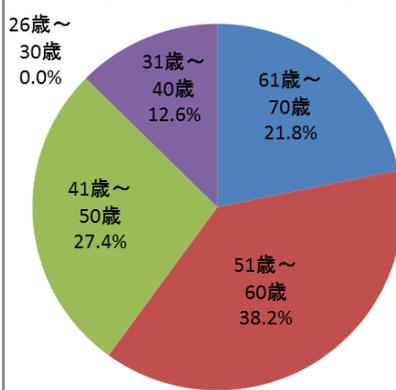
(2017年5月1日現在)

年度\年齢	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	61～70歳
2017	1人 1.4%	6人 8.1%	20人 27.0%	23人 31.1%	24人 32.4%

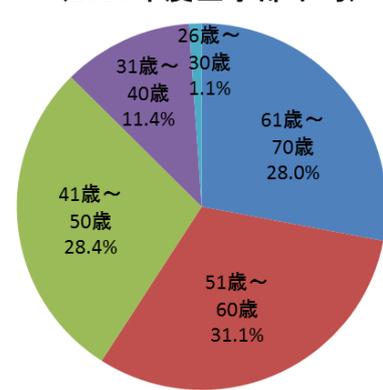
年齢構成比
(2017年度文学部合計)



年齢構成比
(文学部合計過去5年平均)



年齢構成比
(2017年度全学部平均)



5.3 教員の募集・採用・昇任等を適切に行っているか。

①各種規程は整備されていますか。

はい いいえ

【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を簡条書きで記入。

- ・「文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」「文学部人事委員会細則」および各学科「人事に関する内規」
- ・大学の定める「教員の定年に関する規程」「法政大学名誉教授規程」「市ヶ谷リベラルアーツセンター運営委員会規程」「助教規程」「学部任期付教員規程」等

②規程の運用は適切に行われていますか。

はい いいえ

【募集・任免・昇格のプロセス】※簡条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等(非公開)を添付することでも可。

・上記根拠資料のとおり

5.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①学部(学科)内のFD活動は適切に行なわれていますか。

S A B

【FD活動を行うための体制】※簡条書きで記入。

- ・執行部、教学改革委員会が連携して、「専任教員による授業相互参観」の方法改善や集計結果を検討し、教授会全体に周知した。
- ・執行部がテーマを設定し、教授会において研修会を実施した。

【2017年度のFD活動の実績(開催日、場所、テーマ、内容(概要)、参加人数等)】※簡条書きで記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- 各学科で開催されたFDミーティングの回数は以下のとおり。
 哲学科 6回（教育方法・内容、成績不振学生への対応等について研修）
 日本文学科 2回（「大学での国語力」「ゼミナール入門」の授業運営について研修）
 英文学科 16回（言語系・文学文化系に分かれ、教育内容・方法、学習成果について研修、基礎ゼミの授業運営について研修）
 史学科 2回（基礎ゼミの授業運営、シラバスと「振り返りシート」を利用し授業内容について研修）
 地理学科 1回（基礎ゼミの授業運営について研修）
 心理学科 1回（演習系科目における授業運営、成績評価について研修）
 文学部共通科目 5回（授業内容について研修）

【2017年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- 第5回文学部定例教授会（2017年9月13日）において、聴覚障がい学生支援のDVDを視聴し、聴覚障がい学生に対する授業方法の工夫について学習した。参加者53名。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- 2017年度第9回教学改革委員会配付資料「2017年度 教員による授業相互参観実施状況報告書」
- 2017年度第5回文学部定例教授会議事録

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・学部教員の大半が大学院科目を担当し、学科と専攻が連携して教育を運営している。	5.2②
・学科ごとのFDミーティングがほぼ定例化して実施されている。	5.4①

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

文学部では専任・兼任、任期付教員の採用や、教授・准教授への昇格について、求める能力や資質などが教授会規程や内規、細則に明示されている。

教授会執行部の各役職（学部長、教授会主任・副主任各1名）や、各基幹委員会の設置等による役割分担や責任の所在は明らかである。

教員組織と各学科カリキュラムの整合性は十分であり、必要に応じ兼任・兼担教員を配置するなど、網羅的かつ丁寧な教育活動が展開されている。ただし2017年5月1日現在の女性教員比率は21.6%、外国人教員比率は5.4%といずれも高くはないので、今後の是正に期待したい。教員組織の編制は大学院教育との連携を考慮したものになっている。年齢構成には一部偏りが見られるので、新任教員採用人事の際には年齢を考慮するなど、長期的視点に立って引き続き適正化を図りたい。

教員の募集・任免・昇格に関わる各種規程や内規は整備され、その運用は適切である。

学部（学科）内のFD活動は、FD委員会を設置せず執行部と教学改革委員会が連携する体制が取られている。学部の活動としては「授業相互参観」の方法が検討され、また参観者数の集計結果が教授会に周知された。さらに教授会にて「研修会（FDミーティング）」が開催されている（教授会構成員74名中53名出席）。各学科でのFDミーティング回数が定例化していることは評価できるが、1回から16回とややばらつきが見られるので、引き続き教員の資質開発・向上に向けた活動が望まれる。

6 学生支援

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 学生支援に関する大学としての方針に基づきとしての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。

はい いいえ

【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】※箇条書きで記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> 卒業・卒業保留・留年者の把握は、2月の学科会議および教授会で実施されている（秋卒業については9月の教授会で実施）。 休・退学などの学籍異動の把握は、毎月の学科会議・教授会で実施されている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 2017年第1回～第11回文学部定例教授会議事録 	
②学部（学科）として学生の修学支援をどのように行っていますか。	S A B
<p>（～400字程度まで）※修学支援の取り組みの概要を記入（取り組み例：クラス担任、オフィスアワー、学生の能力に応じた補習・補充教育、アカデミックアドバイザーなど）。</p> <p>文学部ではクラス担任制は敷いていないが、「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」、卒業論文の各担当教員が担任に準じる職務を果たし、学生の修学支援を行っている。各学科の学科主任は学生の窓口としての機能を果たし、学生の要望・相談に適切に対応している。また、すべての専任教員はオフィスアワーを設定し、対応する時間・場所を『文学部講義概要（シラバス）』で公開している。なお、各学科における新入生を対象とした個人・グループ面談、懇談会等の実施を通じた学修支援の方策は3.4①に記した。また、上記以外の学科固有の取り組みは以下のとおりである。</p> <p>【哲学科】</p> <p>2015年度に哲学科所属の教員の一人が、自らの資産を元に経済的原因での修学困難者を対象にした奨学金制度を発足させた。</p>	
<p>【2017年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 学生モニター制度を利用して、体育会所属学生の学修支援に関する調査を行った。調査結果に基づき支援の指針をまとめ、教授会で共有した。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 『2017年度文学部講義概要（シラバス）』 2017年度第9回文学部定例教授会議事録、同配付資料「2017年度文学部学生モニター「モニタリング内容と今後の対応案」」 <p>【哲学科】 http://www.hosei.ac.jp/documents/campuslife/shogaku/2015/makino_150501_01.pdf</p>	
③成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。	S A B
<p>【成績不振学生への対応体制および対応内容】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 執行部が各学科主任へ成績不振学生の情報を提供し、対応方策の検討を教学改革委員会でやっている。 実際の成績不振学生への対応は、各学科主任の主導により、学科ごとに行っている。 対応内容としては、「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」担当教員もしくは学科主任による当該学生との面談、学科会議における結果の報告、等である。 執行部および各学科では必要に応じて、学生相談室と連携をとりながら、成績不振学生への対応を行うこともある。そのほか、上記以外の学科固有の取り組みは以下のとおりである。 <p>【英文学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「新入生オリエンテーション」「在学生ガイダンス」において英文学科作成文書「成績不振学生について」を配付し、成績不振の場合には、保証人に通知のうえ、面談を行なう旨の説明を行なっている。 <p>【史学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> 1年生については、12月に判明する2年次以降の所属ゼミ希望調査用紙の未提出者について、履修状況・単位修得状況と成績を確認し、学科主任が本人や保証人に連絡して原因を調査し、相談に応じている。 <p>【心理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> 新入生に対しては、オリエンテーションで少人数のグループに分け、専任教員に割り振って、教員も含めて学生同士が交流できる機会を設けている。また、オリエンテーション直後にピアサポーター主催の歓迎会を、入学式翌日に履修講習会を開催し、大学生活での対人関係や学習システムの違いによるドロップアウトを予防している。 SSI コースの学生は履修の仕方に他の学生とは異なる点があることから、学科所属のSSI 運営委員が早期に面談して丁寧に対応している。 	
<p>【2017年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 従来、秋学期のみ行ってきた成績不振学生との面談を、2017年度より春学期・秋学期に実施することとした。 2018年度以降の成績不振学生への対応について、学部統一の指針を作成することを決定した。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 2017年度第3回・第5回・第7回教学改革委員会議事録 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・2017年度学科主任会議議事録
 ・2017年度第11回文学部定例教授会議事録、同配付資料「2018年度成績不振学生に対する対応について（依頼）（案）」
 【英文学科】「成績不振学生について」（新入生オリエンテーション・在学生ガイダンス配付資料）

④学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。 S A B

（～400字程度まで）※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。
 外国人留学生の修学支援は、入学時の個人・グループ面談を通じて行うほか、「基礎ゼミ」等および「ゼミナール」「演習」の担当教員によって行われている。
 なお、上記以外の学科固有の取り組みは以下のとおりである。
 【日本文学科】
 学科内に留学生サポート小委員会を設置し、「1年次留学生履修相談会」の開催、成績不振学生の調査、面談等を行っている。
 【史学科】
 中国・韓国からの留学生が多いため、東洋史専攻の教員が対応することが多い。
 【地理学科】
 18年度から留学生と日本人学生とのペアリングによる相互チューターを試験的に行うことにした。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
 【日本文学科】留学生サポート小委員会履修相談資料

⑤学部（学科）として学生の生活相談に組織的に対応していますか。 S A B

（～400字程度まで）※学生の生活相談に関する取り組み概要を記入。
 「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」、卒業論文の各担当教員と学科主任が、学生の生活相談を受け付け、必要な助言を与えるほか、学内の関連部局と連携して課題の解決に当たっている。各学科では必要に応じて学科会議で課題の共有を図り、解決に向けて協力している。また、障がい、LGBTなどに関わる課題については、執行部も関与し、学内部局との調整を図り、対応を行っている。
 なお、専任教員はオフィスアワー等を活用して学生への個別相談を行っている。また、各学科が実施する新入生面談については3.4①参照。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
 ・特になし

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・成績不振学生、体育会所属学生等が有する課題を調査し、課題への対応のあり方について教授会で共有している。	6.1②③

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・学内の同規模他学部に対して、退学者数がやや多い点が課題である。	6.1②③
・外国人留学生の学修支援の一層の充実化が必要である。	6.1④

【この基準の大学評価】

文学部では、卒業・卒業保留・留年者・休学者・退学者に関して学科会議と教授会で適切に把握している。
 修学支援に関しては、基礎ゼミから卒業論文に至る複数科目の担当教員、あるいは学科主任が大きな役割を果たし、オフィスアワーも適切に設定され、学生に周知されている。2017年度は学生モニター制度が活用され、体育会所属学生の学習支援に関する調査を行い、その結果に基づき支援の指針が策定・共有されたことは高く評価できる。
 成績不振学生に対しては、執行部が各学科主任に情報を提供し、教学改革委員会が方策の検討を行い、各学科主任が主導して学科ごとに主として面談が行われ、学科会議でその結果が報告されている。「学生相談室」との連携も図られており組織的な支援体制がとられている。2017年度からは、成績不振学生との面談を従来の秋学期に加えて春学期も実施することとし、さらに学部で統一した対応指針が作成されることになった。成績不振学生が退学に至る場合が多いことから、退学者を減らすためにもこうした取り組みの効果検証が望まれる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

外国人留学生の修学支援については学部として特段の取り組みは認められないが、留学生サポート小委員会を設置して面談などのきめ細やかな対応を行ない（日本文学科）、留学生と国内学生とのペアリングによる相互チューター制度を設ける（地理学科、2018年度から試験的に実施）など、学科ごとの対応は評価に値する。ただし留学生の入学が増加傾向にある状況に鑑み、学部による組織的な支援体制の確立に向けて今後の検討が期待される。

学生の生活相談は基礎ゼミやゼミナールなどの担当者、学科主任、また課題によっては執行部が関わり、学部教職員だけでは対応が困難な場合には学内事務局とも連携して、組織的に対応している。

7 教育研究等環境

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

7.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。	
①ティーチング・アシスタント（TA）、リサーチ・アシスタント（RA）、技術スタッフなどの教育研究支援体制はどのようになっていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
(～400字程度まで) ※教育支援体制の概要を記入。 ・実習系の科目においてTAを配置している。2017年度の実績は以下のとおりである。 日本文学科3科目、史学科4科目、地理学科27科目、心理学科16科目 ・地理学科主催科目「現地研究」においては、現地研究補助員を配置している（2017年度は3科目）。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2017年度文学部TA人件費算出内訳資料	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

文学部では、日本文学科、史学科、地理学科、心理学科の計50科目の実習系科目でTAが配置されている。また現地研究補助員を配置している科目もあり、教育支援のための大学リソースが活用されている。

8 社会連携・社会貢献

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

8.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また教育研究成果等を適切に社会に還元しているか。	
①学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組み及び社会貢献活動を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。 各学科で以下のような取り組みが行われている。 【哲学科】 ・専任教員が、消防・下水道等に関する地方自治体の行政審査会の会長を務め、地域社会への貢献に努めている。 ・専任教員が、民間での哲学講座の講師を務め、一般市民に向けた哲学的教養の普及に努めている。 【日本文学科】 ・学科教員の社会活動の概要……印刷博物館外部委員として、同館の将来構想策定に参画（小秋元）、新沖縄文学賞の選考委員・大阪女性文芸賞の選考委員・農民文学賞の選考委員・産経新聞プロミスエッセイ大賞の選考委員・韓国文学翻訳	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

コンクール選考委員・文芸家協会理事・日本近代文学館評議員（以上、中沢）、上野学園大学日本音楽史研究所特別研究員（ネルソン）

- ・学科教員による市民向け講座等の実施件数 40件（6名）
- ・その他……教員免許更新講習（小秋元・中丸）

【史学科】

- ・中国の龍門石窟、復旦大学文物與博物館学系、少林寺と学術協定を締結し、学生の国際性の涵養に努めている。
- ・学科教員1名が、日韓中3国の西洋古代史研究者と連携し、国際シンポジウム（原則として3年に1度、日韓中3国の持ち回りで開催）に、組織委員、司会、報告者、コメンテーター等として、参加もしくは関与している。2017年度は早稲田大学で開催された「第11回日韓中西洋古代史シンポジウム」で組織委員、司会、コメンテーターを務めた。
- ・学科教員による市民向け講座等の実施 3件

【地理学科】

- ・学外組織との連携事業の概要……①2017年2月に中国中山大学と合同の巡検を富士山・箱根周辺にて行った。参加者は院生・学生など総勢46名。②2017年7月、東京都などが主催する「打ち水日和」を学内キャンパスで実施し、本学教職員、学生のほか、近隣高校生も参加した。③国立極地研究所との共同研究2件、④名古屋での現地研究実施の際に名古屋水道局とプログラムを作成し実施（参加学生30名）
- ・学科教員の社会活動の概要……①「新河岸川流域の川づくり連絡会」（国土交通省）の顧問、②「身近な水環境の全国一斉調査」実行委員、③近隣小学校での理科、総合学習等での調査協力、④ゼミ生とともに九州北部豪雨災害の復興ボランティアに参加（2回）、⑤産業技術総合研究所客員研究員、⑥南極観測審議委員会地圏専門部会副委員長、⑦日本学術会議委員、⑧長良川河口堰開門検討委員会委員
- ・学科教員による市民向け講座等の実施件数 7件

【心理学科】

- ・学科教員の社会活動の概要……NPOいろえんぴつコミュニティズ顧問（高橋）、財団法人積善会曾我病院評議員（高橋）、文化審議会国語分科会臨時委員（福田）、徳島県教育委員会発達障がい教育・自立促進アドバイザー（島宗）、（株）日本能率協会マネジメントセンター企業研修プログラム開発の監修（島宗）、スポーツ庁「学校における子供の体力向上課題対策プロジェクト（テーマ1 体力低下種目の課題対策プログラムの開発等）」有識者委員（林）、日本パラリンピック委員会競技団体サポートスタッフ（荒井）、日本スポーツ振興センターアスリートキャリアアドバイザー育成プログラム講師（荒井）、日本バスケットボール協会コーチ養成講習会講師（荒井）、日本サッカー協会審判員研修会講師（荒井）
- ・学科教員による市民向け講座等の実施件数 8件
- ・その他……全国柔道整復学校協会主催の教員研修会講師（藤田）、仁愛大学FD・SD学内研修会講師（藤田）

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

文学部の社会連携・社会貢献に関しては、6学科のうち5学科の多くの教員が多種多様な分野で活発な取り組みを行っており、特に複数回にわたる継続的な活動も見受けられ、評価できる。

9 大学運営・財務

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

9.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の役職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

①学部長をはじめとする所要の職を置き、また教授会等の組織を設け、これらの権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。	はい いいえ
(～200字程度まで) ※概要を記入。 「法政大学文学部教授会規程」および「文学部教授会規程内規」にしたがって、学部長をはじめとする各職が設置され、権限が明確化された教授会以下、学部運営に必要な各種委員会が適切に運営されている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「法政大学文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

文学部では学部長と所要の役職（教授会主任、教授会副主任）が適切に置かれ、教授会や各種委員会組織も適切に設けられている。それらの権限と責任を明示した教授会規程や学部運営に関する規程が整備されており、必要に応じて見直しが行われ、規程に則った学部運営が図られている。
--

Ⅲ 2018年度中期・年度目標

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	体系的な専門科目と幅広い教養科目から成る現行のカリキュラムを維持・発展させる。特に、初年次教育を充実化し、多様な学生に対する円滑な大学教育への導入を図る。また、時代の変化に対応した科目設定の見直しを不断に行うとともに、より幅広い学びを可能とするカリキュラムのあり方についても検討する。
	年度目標	①各学科において、カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）について検証し、必要に応じて改編を行う。
	達成指標	①カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）を検証するための学科会議を開催する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
2	中期目標	体系的な専門科目と幅広い教養科目から成る現行のカリキュラムを維持・発展させる。特に、初年次教育を充実化し、多様な学生に対する円滑な大学教育への導入を図る。また、時代の変化に対応した科目設定の見直しを不断に行うとともに、より幅広い学びを可能とするカリキュラムのあり方についても検討する。
	年度目標	②HOSEI2030 キャンパス再構築特設部会の答申を受け、学部教育の「大括り化」に向けた議論に着手する
	達成指標	②HOSEI2030 キャンパス再構築特設部会の答申を受けて審議を開始し、「大括り化」実現のための施策の立案の手順について合意を得る。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
3	中期目標	学生の主体的な学びをさらに実現するための方策を積極的に導入する。特に、ゼミナール以外の科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業等のさらなる導入を図る
	年度目標	100分授業の実施にともない、講義科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業の有効な導入事例に関する情報を共有する。
	達成指標	教授会において研修会を開催する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
4	中期目標	学習成果の多様で、効果的な測定方法の導入を検討する。特に、ゼミナール、卒業論文以外の科目における学習成果の測定方法について検討を深め、点検・評価活動へ活用する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	年度目標	学習ポートフォリオ、学生アンケート、ルーブリック等の導入事例に関する情報を共有する。
	達成指標	教授会において研修会を開催する。
No	評価基準	学生の受け入れ
5	中期目標	学部および各学科が定めるアドミッション・ポリシーを体現する現行の各種入試制度を維持するとともに、その発展をめざし、一般入試の出題形式、特別入試の試験形式等の見直しを図る。
	年度目標	2019年度一般入試・特別入試（特に外国人留学生入試）の変更点の効果を検証し、2020年度入試の改革へ反映させる。
	達成指標	入試小委員会において左記を検証し、2020年度入試への改善提案を行う。
No	評価基準	教員・教員組織
6	中期目標	各学科の人事に関する内規に従い、専任教員の募集、採用、昇格を適切に行うとともに、年齢、国際性等において多様性をもった教員構成の実現をめざす。
	年度目標	年齢、国際性等の観点で教員組織の現状を検証し、さらなる多様性の追求を図る。
	達成指標	人事委員会において左記を検証し、各学科の新規採用人事に向けた情報を提供する。
No	評価基準	学生支援
7	中期目標	①成績不振学生、外国人留学生、体育会学生等への個別指導を丁寧に行う。
	年度目標	①成績不振学生への丁寧な個別指導を行うだけでなく、成績不振理由を調査し、理由ごとの対応のあり方について検討する。
	達成指標	①成績不振学生への個別指導に関する指針を作成し、それにもとづき、春学期・秋学期とも個別指導を行い、結果を教学改革委員会で報告する。
No	評価基準	学生支援
8	中期目標	②学生のキャリア支援に関する施策を積極的に導入する。
	年度目標	②キャリア支援をめぐる学部の課題を抽出し、問題点の共有化を図る。
	達成指標	②執行部とキャリアセンターで協働して課題を精査し、教授会で報告を行う。
No	評価基準	社会貢献・社会連携
9	中期目標	社会人の学び直しの動向を受け、いま以上に社会人の学修の機会を提供するよう努める。
	年度目標	社会人入試制度（編入試験を含む）、社会人向けプログラム、履修証明プログラム等の諸制度について検討を行う。
	達成指標	教学改革委員会、入試小委員会において左記の検討を行う。
【重点目標】		
〔年度目標〕100分授業の実施にともない、講義科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業の有効な導入事例に関する情報を共有する。		
〔施策〕2018年度第5回教授会において、有効な取り組みを実践している教員を講師としたワークショップを実施する。		

【2018年度中期・年度目標の大学評価】

文学部の中期・年度・重点目標はいずれも自学部の課題を的確に把握した結果であり、その対応策を真摯に企図している点において適切である。ほぼすべての項目が具体的であり、たとえば社会貢献・社会連携の項で「社会人の学び直し」に焦点を定めたことは現実に即しており、2018年度から社会人入試制度や社会人向けプログラムなどの諸制度検討に着手することは大いに評価できる。また成績不振学生への対応指針策定やキャリア支援のためのキャリアセンターとの連携など、積極的な取り組みが標榜され、HOSEI2030キャンパス再構築特設部会の答申を受けて学部教育の「大括り化」に向けた議論に着手するとの年度目標は、意欲的かつ時宜を得たものである。しかしながら教員・教員組織の項における年度目標は「多様性の追求を図る」ことで、その指標は「情報提供」ととどまっている。また教育課程・学習成果のうち教育方法と学習成果の項では、多様で効果的な測定方法に関する「情報共有」が年度目標となっている。第一歩として情報共有や情報提供が重要であることは言を俟たないが、それにとどまらず必要な改善や改革が実施されることを期待したい。

【大学評価総評】

文学部は、2016年度までの各評価基準に関する取り組みを2017年度もおおむね継続し、全体的な質的保証を損ねることなく、さらなる改善等も行っている点は、評価できる。同学部は全体の理念や方針に基づきながら6学科が自律性を保ち、堅固な教育体制を敷き、積極的な学部運営を行っている。2017年度は質保証委員会の開催回数が増え、同委員会の役割について議論が行われており、今後はいっそう能動的で主体的な質保証活動が期待される。教育課程は順次的・体系的

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

に編成され、資質の高い教員体制のもとでバランスの取れた教育内容が提供されている。これから重要性が増すであろう国際性の涵養や留学生の修学支援について、学科によっては斬新な試みが導入されているので、そうした動きが学部全体で組織的に展開されることが望ましい。教育方法や学習成果について課題はあるものの（たとえば学生の授業外学習時間の確保や留学者等の既修得単位の認定基準策定、成績分布の把握など）、中期目標においてその一部対応が目指されているので、引き続き善処が求められる。また 2016 年度に指摘され継続して憂慮案件として挙げられる教員の負担軽減にも取り組み、教育と研究のさらなる充実に努められたい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。